




世界の都市総合力ランキング

Global Power City Index



2008年10月
財団法人森記念財団 都市戦略研究所

目 次

1. 本ランキングの目的・趣旨	1
2. 本ランキングに用いた都市の評価方法	6
3. 30都市の選定方法	17
4. 結果の概要	20
5. 個別結果	32
6. 世界の主要都市と比較しての東京の課題	48

<資料編>

資料1. 検討メンバーの略歴	資-1
資料2. 有識者パートナー一覧	資-3
資料3. 分野別・アクター別指標マトリックス	資-4
資料4. 分野別総合ランクトップ3都市とアジアの主要3都市の評価結果概要	資-5
資料5. 主要な既存ランキング	資-7

1. 本ランキングの目的・趣旨

(1) 本ランキングの目的・趣旨

世界の都市総合力ランキング「Global Power City Index」は、**地球規模で展開される都市間競争下において、より魅力的でクリエイティブな人々や企業を世界中から惹きつける力こそが「都市の総合力」である**との観点に立ち、世界の主要都市の総合力を評価し順位付けしたものである。

急速に進展するグローバル化の中で、世界的な都市間競争はますます激しさを増している。今日の都市は、資本、企業、有能な人材、訪問客などをより多くひきつけるため、自らの魅力をいかに高めるかに腐心している。

これまでに、世界各国の都市の力、魅力、競争力を比較したランキングは様々存在する。世界的な巨大都市のひとつである東京も、否応なく都市間競争のただ中にあるが、こうした既存のランキングにおいては、特にアジアの各都市との比較において、その競争力を低下させつつあるとの指摘もなされている例がみられる。加えて、興味深いことに、これまで日本において同様の世界都市比較を行った例はなかった。

本ランキング「Global Power City Index」は、独自の視点から、現在の地球規模の都市間競争下における最も魅力的な競争力を発揮できる都市はいかなる都市であるか、を明らかにしようとするものである。また、こうした取り組みは、日本初のものである。

この結果により、東京や世界の都市が持つ魅力や課題を再認識し、都市の政策立案や企業戦略形成に役立てることが可能となった。

本ランキングの特徴

1. 都市の総合力をランキングする調査としては日本初の取り組みである。
2. 既存のランキングのほとんどが、特定分野もしくは国別のランキングであるのに対し、都市の力を表す様々な分野を対象として都市の総合力を評価したランキングである。
3. 世界を代表する主要 30 都市を選定し、都市の力を表す主要な 5 分野（「経済」「研究・開発」「交流・文化」「居住・環境」「空間・アクセス」と、さらに現代の都市活動を牽引する 4 つのグローバルアクター（「経営者」「研究者」「アーティスト」「観光客」）ならびに都市の「生活者」という 5 つのアクターに基づき、これらのマトリックスから複眼的に都市の総合力を評価している。
4. 都市評価に関する世界的権威であるピーター・ホール卿をはじめとする学識者や各界の識者等の参画による、第三者のピアレビュー（専門家による評価）を得たランキングである。

(2) 本調査で明らかになった結果の主なポイント

1) 分野別総合ランキング

分野別総合ランキングのトップ3はニューヨーク、ロンドン、パリである。
東京は4位であるが、トップ3とは点差にかなりの開きがある。

2) 分野別ランキング

「居住・環境」分野および「空間・アクセス」分野におけるフランクフルト、アムステルダムやベルリンなど、総合ランクで下位でも特定の分野では上位にランクされ優位性を発揮する都市が存在する。

アジアには「経済」分野に特化した都市が多い一方で、欧州には「交流・文化」「居住・環境」「空間・アクセス」分野で上位にランクされている都市が多い。

3) アクター別ランキング

都市活動の表舞台で活躍する4つのグローバルアクター、都市生活者、いずれのアクターの視点からみても、魅力的といえる都市はニューヨーク、ロンドン、パリである。これらの都市は総合スコアでも他の都市を引き離しており、オールマイティな魅力を備えた都市である。

アジアの都市は「経営者」を除く各アクターにとって、30都市中21位以下にランクされる都市数が5割以上を占め、特に「生活者」の視点からの評価が著しく低い都市が多い。

4) 分野別ランキングとアクター別ランキングの関係

GDPや企業集積などの「経済」指標が高い都市が、必ずしも「経営者」の視点からみて魅力的な都市であるとは限らない。

5) 東京と総合ランクトップ3都市（ニューヨーク、ロンドン、パリ）との比較

東京は、分野別では「交流・文化」「空間・アクセス」が著しく劣っている。
アクター別では、「生活者」の視点からは他都市に比肩する評価を得られているが、その他のアクターの視点からみた評価は低く、特に「経営者」と「観光客」の視点からみた評価ではトップ3都市から大きく引き離されている。

6) 東京とアジアの主要経済都市との比較

東京はアジアの他の主要経済都市と比較して、「研究・開発」の分野は極めて優位性があるが、「居住・環境」や「空間・アクセス」ではアジアの諸都市に比べて特に優位性があるわけではない。

アクター別にみても「研究者」の視点からみた評価は高いものの、「経営者」や「観光客」の視点からみた評価はアジアの中でも低い方である。

7) 東京と BRICs 諸国内の 5 都市との比較

東京は、成長著しい(B)RICs の諸都市と比較して、「経済」「研究・開発」「居住・環境」の分野において優位性が認められる。ただし「経済」は香港、上海とはスコアが接近しており、必ずしも高い優位性を持っているわけではない。

アクター別にみると、香港は、「経営者」、「観光客」では東京を上回っている。

8) 世界の主要都市と比較しての東京の課題

「経営者」に魅力的な都市とするための東京の課題は、規制や税率などの面でビジネスの容易性を向上させることや災害危険度の低減等、ビジネスをとりまく環境の改善である。

「観光客」に魅力的な都市とするための東京の課題は、ハイクラスホテルの充実や魅力的な観光資源を充実させること等、観光をとりまく環境の改善である。

(3) 主要な既存ランキングとの違い

既存のランキングのほとんどが、特定分野もしくは国別のランキングであるのに対し、都市の力を表す様々な分野を対象として都市の総合力を評価した初めてのランキングである。

これまでに、世界各国の都市の力、魅力、競争力を比較したランキングや指標は様々なものの、日本において同様に世界の都市比較を行った例はない。また**本ランキングのように、都市の力を表す様々な分野を対象とし、現代の都市活動を牽引するアクターからの視点を入れ、都市の総合力を評価したランキングは世界でも例がない。**

都市のランキングに関する既存調査のうち主なものの内容は以下のとおりである。

表 1-1 世界の主な既存の都市のランキングと本調査の比較

機関	森記念財団	MasterCard (マスターカード)
名称	Global Power City Index	Worldwide Centers of Commerce Index (ビジネスセンター指標)
分野	総合系	ビジネス系
対象国・都市 (発表年)	世界 30都市 (2008年)	世界 75都市 (2008年)
評価軸	5分野 「経済」 「研究・開発」 「交流・文化」 「居住・環境」 「空間・交通」 5アクター 「経営者」 「研究者」 「アーティスト」 「観光客」 「生活者」	1. 法律・政治上の枠組み(10%) 2. 経済安定性(10%) 3. ビジネスのしやすさ(20%) 4. 金融(22%) 5. ビジネスセンター度(12%) 6. 知的財産・情報(16%) 7. 住みやすさ(10%)
評価手法	・評価軸ごとにランクづけ、分野別に総合ランクを算出 ・5分野、5アクターを複眼的に評価	・上記6指標を上記ウエイトづけし算出 ・評価軸及び評価指標は有識者が選定 ・7種の評価軸、それを構成する43の指標、74の準指標によって評価
指標数	63指標	74指標
東京の順位	分野別総合4位 ※各分野別スコアを合計した「総合スコア」の順位	3位

機関	City of London	Globalization and World Cities (Loughborough University)
名称	Global Financial Centres Index 4 (国際金融センター指標)	Leading World Cities
分野	金融系	総合系
対象国・都市 (発表年)	世界 50都市 (2008年9月)	世界 52都市 (2004年)
評価軸	A. 人的要素 B. ビジネス環境 C. マーケットアクセス D. インフラ E. 一般的な競争力	A. 経済的グローバリゼーション B. 文化的グローバリゼーション C. 政治的グローバリゼーション D. 社会的グローバリゼーション
評価手法	・統計データに加えアンケートを実施 ・5種の評価軸、それを構成する57の指標によって評価	・4分野について、(1)規模性、(2)ネットワーク性から評価
指標数	57指標	14指標
東京の順位	7位	特定分野に貢献しているグローバルシティ

表 1-2 その他の世界のランキング概要

	都市		国
機関	プライスウォーターハウスクーパース(PwC)		世界経済フォーラム(WEF)
名称	Cities of Opportunity: Business-readiness Indicators for the 21st Century		世界競争力調査(World Competitiveness)
分野	ビジネス系		経済系
対象国・都市	世界 11都市 (2007年)		世界 134カ国・地域 (2008-2009年)
評価対象	ビジネス環境		国の生産性
機関	エコノミスト(EIU)		国際経営開発研究所(IMD)
名称	都市の住みやすさランキング(Livability Ranking)		世界競争力指標(Global Competitiveness Index)
分野	居住系		経済系
対象国・都市	世界 127都市 (2005年)		世界 55カ国・地域 (2008年)
評価対象	住みやすさ		企業の競争力環境
機関	ミュンヘン再保険会社		日本経済研究センター
名称	災害危険指標(Natural Hazard Index)		潜在競争力ランキング
分野	災害系		経済系
対象国・都市	世界 50都市 (2005年)		世界 50カ国 (2006年)
評価対象	リスク		今後10年間にどれだけ1人当たりGDPを増加させるか
機関	マーサー社		世界銀行
名称	生計費調査		ビジネスしやすさ指標(Ease of Doing Business)
分野	生活系		ビジネス系
対象国・都市	世界 143都市 (2008年)		世界 178カ国・地域 (2007年)
評価対象	生計費		ビジネスの規制環境
機関	マーサー社		エコノミスト(EIU)
名称	生活の質調査		IT産業競争力指標
分野	生活系		IT系
対象国・都市	世界 350都市 (2008年)		世界 64カ国 (2007年)
評価対象	生活の質調査		IT企業の競争力環境
機関	UBS		イエール大学
名称	物価・所得調査		環境パフォーマンス指標(EPI)
分野	生活系		環境系
対象国・都市	世界 71都市 (2006年)		世界 133カ国 (2006年)
評価対象	物価・所得調査		環境パフォーマンス
機関	中国社会科学院		
名称	Global Urban Competitiveness Report(2007-2008)		
分野	ビジネス系		
対象国・都市	世界 500都市 (2008年)		
評価対象	business worth		

2. 本ランキングに用いた都市の評価方法

(1) ランキングの検討体制

本ランキングは、竹中平蔵 慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所 所長・教授 を委員長とし、加えて都市評価に関する世界的権威であるピーター・ホール卿をはじめとする学識者や各界の識者等の参画による、第三者のピアレビュー（専門家による評価）を得たランキングである。

本ランキングは、下表に示した4つの主体からなる検討体制により作成した。

委員会を頂点とし、各界の有識者の助言を得つつ、ワーキンググループが会合を重ね、ランキング作成の実作業を担った。

委員会は、竹中平蔵 慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所 所長・教授 を委員長とした計5名により構成し、ピーター・ホール ロンドン大学教授を最高顧問(Principal Advisor) とし、ランキング作成過程の主要なポイントでのスーパーバイズを行った。

ランキング作成の実作業は、ワーキンググループによる討議を重ねることで進められ、特に初期段階において、**有識者パートナーからアクターにかかる助言を得て、ランキングの骨格を形作っていった。**

なお、こうした**ランキングの作成過程及び結果の妥当性については、2名の第三者評価員に依頼し、内容の確認及び改善点の指摘を頂いた。**

本ランキングはこうした体制のもと、最終的に取りまとめられたものである。

表 2-1 検討体制

主体	メンバー	役割
最高顧問: ピーター・ホール教授 委員会	委員長: 竹中平蔵 慶應義塾大学教授 委員: リチャード・ベンダー カリフォルニア大学名誉教授 サスキア・サッセン コロンビア大学教授 市川宏雄 明治大学教授	ランキング作成の スーパーバイズ
第三者評価員 (ピアレビューア-)	アレン・J・スコット UCLA 教授 ピーター・ネイカンブ フリー大学教授	成果についての 評価
各界の有識者 パートナー	各界の有識者	アクターの視点に 係る助言
ワーキング グループ	主査:市川宏雄 明治大学教授 構成員: 財団法人森記念財団 森ビル株式会社アカデミーヒルズ事業部 株式会社三菱総合研究所	ランキング作成 作業

(2) ランキングの作成方法

都市の力を表す主要な5つの分野（「経済」「研究・開発」「交流・文化」「居住・環境」「空間・アクセス」と、さらに現代の都市活動を牽引する4つのグローバルアクター（「経営者」「研究者」「アーティスト」「観光客」）ならびに都市の「生活者」という5つのアクターに基づき、これらを説明する「指標」のマトリックスから複眼的に都市の総合力を評価している。

本ランキングは、これまで各種機関から発表されているようなランキングにある、都市の一側面を切り取った『分野別』の視点にもとづくランキングだけではなく、現代の都市活動を牽引するグローバルアクターと都市生活者という着眼点のもと、その主体の属性別からみた都市の評価という『アクター別』の視点の2つから構成されている。

本ランキングの体系は、P8のようなマトリックスで示される。ワーキンググループや有識者パートナーとの議論をもとに分野別、アクター別に、指標収集の枠組み等を構築した。

1) 分野別

分野別ランキングは、「経済」、「研究・開発」、「交流・文化」、「居住・環境」、「空間・アクセス」の5分野からなり、それぞれ、14指標、8指標、13指標、18指標、10指標の計63指標から構成される。

分野別の指標収集の枠組みは、P9のように示される。

2) アクター別

グローバルに活動するアクターの視点からみた都市の評価という本ランキングの主旨に鑑み、現代の都市活動を牽引する4つのグローバルアクターである「経営者」、「研究者」、「アーティスト」、「観光客」と、都市の「生活者」の5つに決定した。

また、それぞれのアクターにおいて、その職業等から都市に求める基本的性能は異なることが予想され、そのため何を重視するか、優先度はアクターごとに異なると考えられる。この都市に求める重要な要素をP10の図のように整理した。

それぞれのアクター別に、47指標、25指標、25指標、25指標、38指標から構成される。

尚、指標は、分野別で用いた全63指標の中から、それぞれのアクターに関連する指標を選択したものであるため、アクター間で重複して選択される指標がある。

図 2-1 ランキングの体系

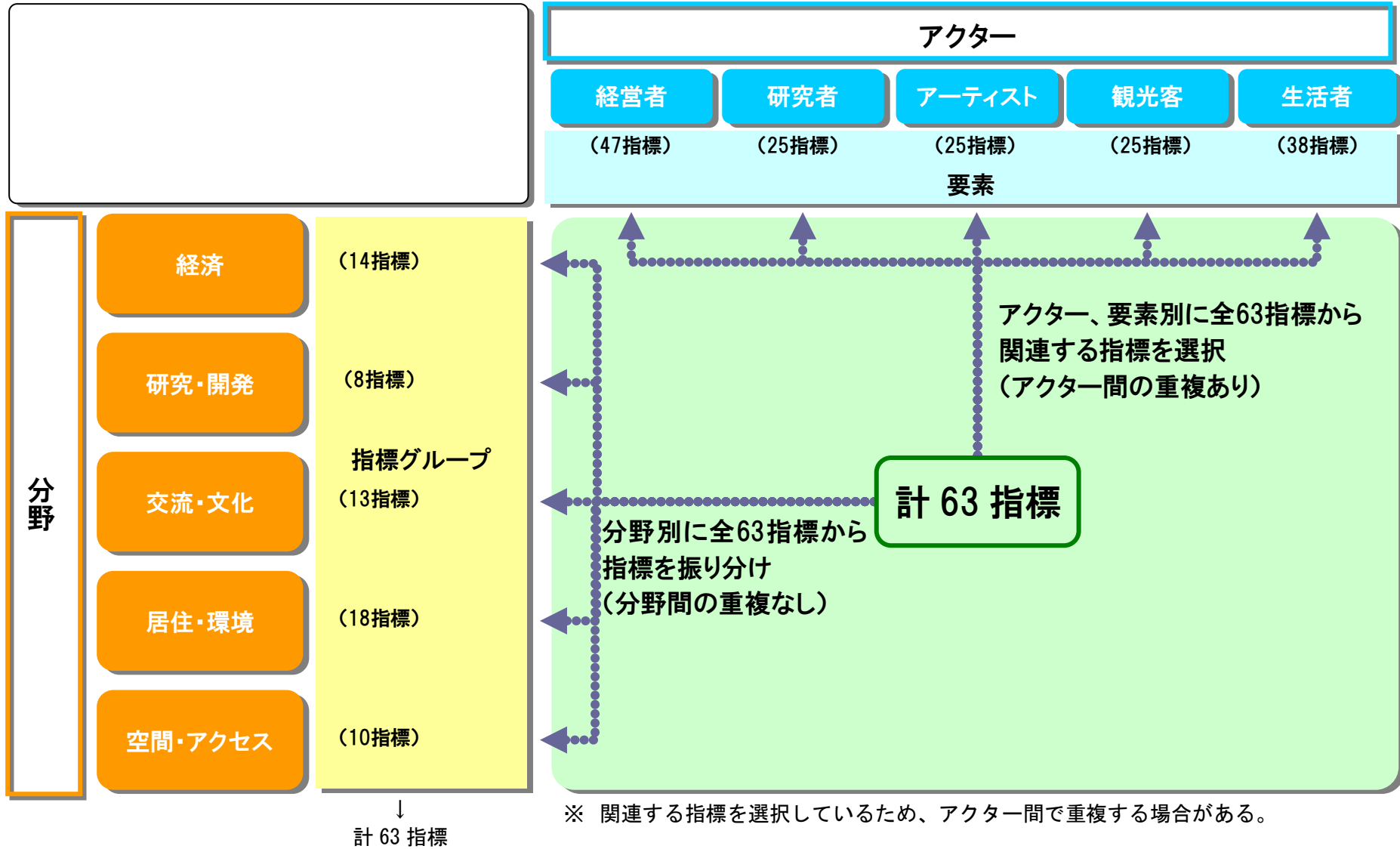


図 2-2 分野別ランキングの体系

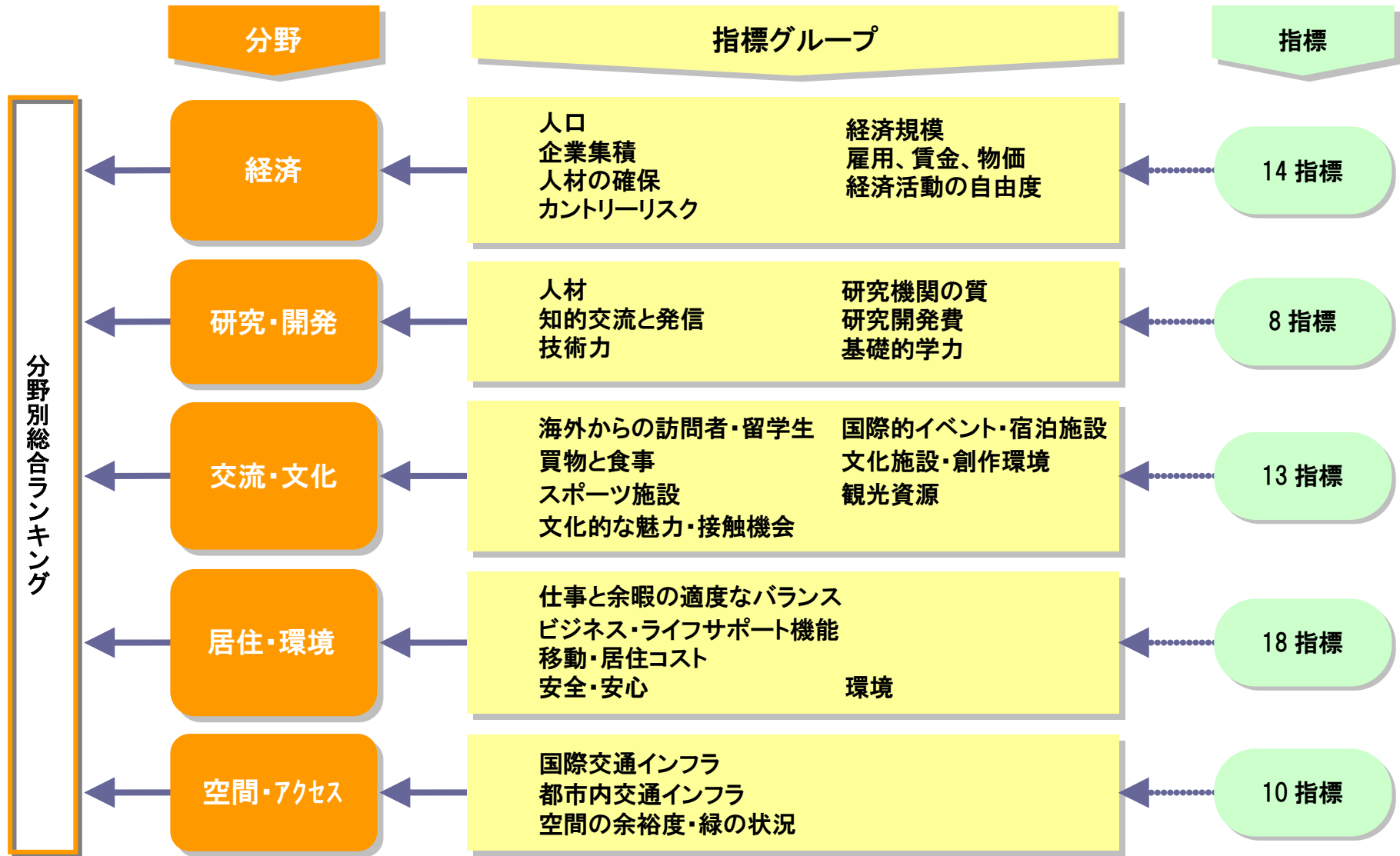
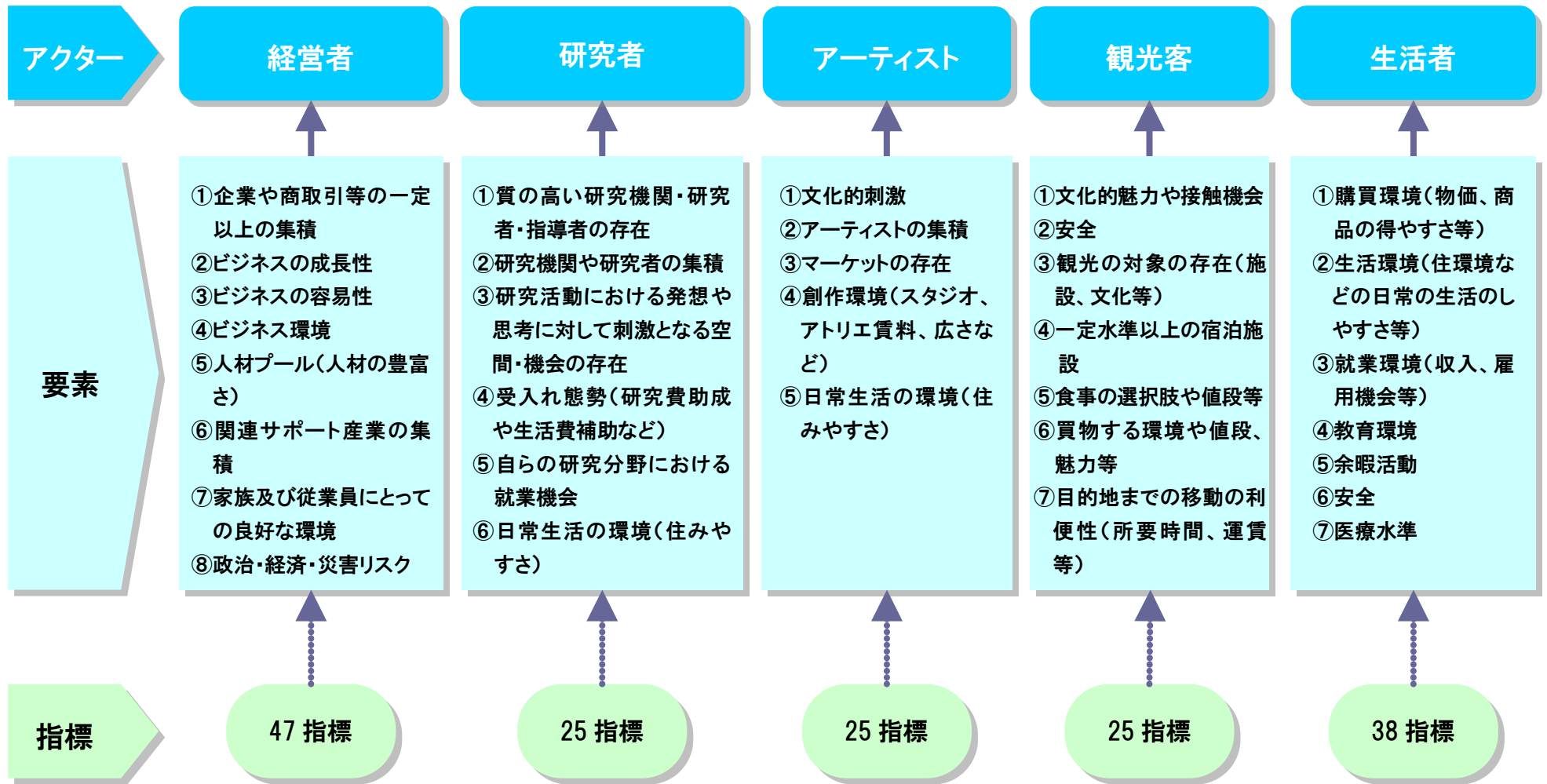
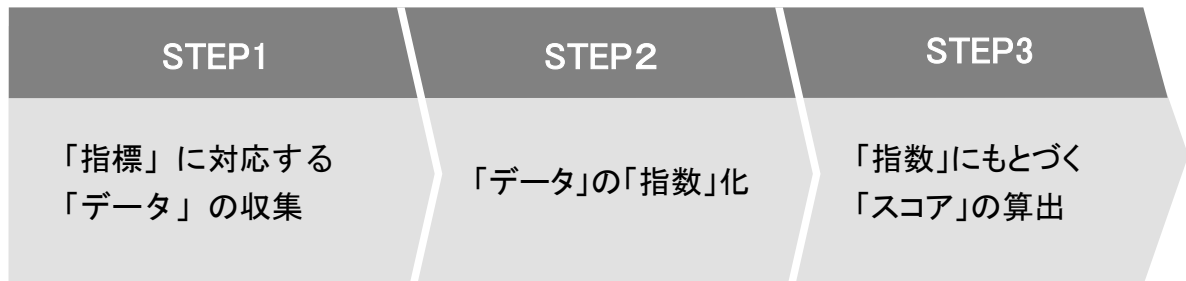


図 2-3 アクター別ランキングの体系



(3) ランキング算出方法

本ランキングを算出するにあたっては、次の3つのプロセスをとった。



STEP 1 : 「指標」に対応する「データ」の収集

対象都市（30 都市。選定プロセスについては、次項 3.を参照）に関する 63 の「指標」について、統計データや既存調査、独自アンケートから、対応するデータを収集した。

なお、都市を表現するために抽出した 63 の「指標」の内訳は、

- ・統計から収集したもの： 45 指標
- ・「世界生活環境レポート（Quality of Living Survey）」¹
（以下、MERCER データ）から収集したもの： 7 指標
- ・独自アンケートから収集したもの： 11 指標

となっている。

STEP 2 : 「データ」の「指数」化

STEP 1 で収集した「データ」を、共通の基準で評価するために、原則として、各「指標」において、「データ」の最大値を 100、最小値を 0 とする「指数」に換算した（このプロセスを「指数」化と称する）。

なお、MERCER データを利用した 7 指標については、データ自体が 0 から 10 までの数字になっていることから、これを 10 倍することで、「指数」化した。

また、アンケートデータについては、集計結果を点数に置き換えた後、その最大値を 50、最小値を 0 とする「指数」に換算した。最大値を 50 としたのは、アンケートの回答が、一般的にばらつきが大きく、その影響度を抑えるためにも、統計によるデータに比べて 1/2 程度の重要度として取り扱うことが妥当と判断したためである。

¹ マーサー・ヒューマン・リソース・コンサルティング株式会社による「世界生活環境レポート（Quality of Living Survey）」を活用した。これは、世界各都市における様々な項目に対するアンケート調査を取りまとめ、それぞれの項目について 0 から 10 までの 11 段階評価を行ったものであり、海外に社員を赴任させる機会のある企業などが、「赴任手当」「危険手当」などを算出する際の参考資料として利用している実績のある資料である。以降、このデータ群を MERCER データと称する。

STEP 3 : 「指数」にもとづく「スコア」の算出、ランク付け

分野別ランキングについては、5つの各分野の「指標」をもとに、それらの「指数」の平均をとり、「スコア」とし、点数が高い順に対象都市をランク付けした。さらに、各分野の「スコア」の合計を「総合スコア」とし、これを分野別総合ランクとした。

アクター別ランキングについては、各アクターが都市に求める重要な要素を5つから8つ設定した上で、各要素を説明する「指標」を全63指標の中から抽出し、各要素の計算結果を合計して「スコア」とした。この「スコア」が高い順に対象都市をランク付けした。

■分野別、総合及びアクター別「スコア」算出について

ア) 分野別・総合スコア算出

- ・ 各分野のスコアは、各分野に含まれる指標の指数化されたデータを平均することにより算出した。この平均値の順位が、当該都市の分野別の順位となる。
- ・ なお、指標ごとに重み付けは考慮していない。
- ・ データが取得できなかった指標については、データなしと判断し、算式に含めない。
- ・ 各分野のスコアの合計値が、当該都市の総合スコアとなり、この順位が総合ランキングである。

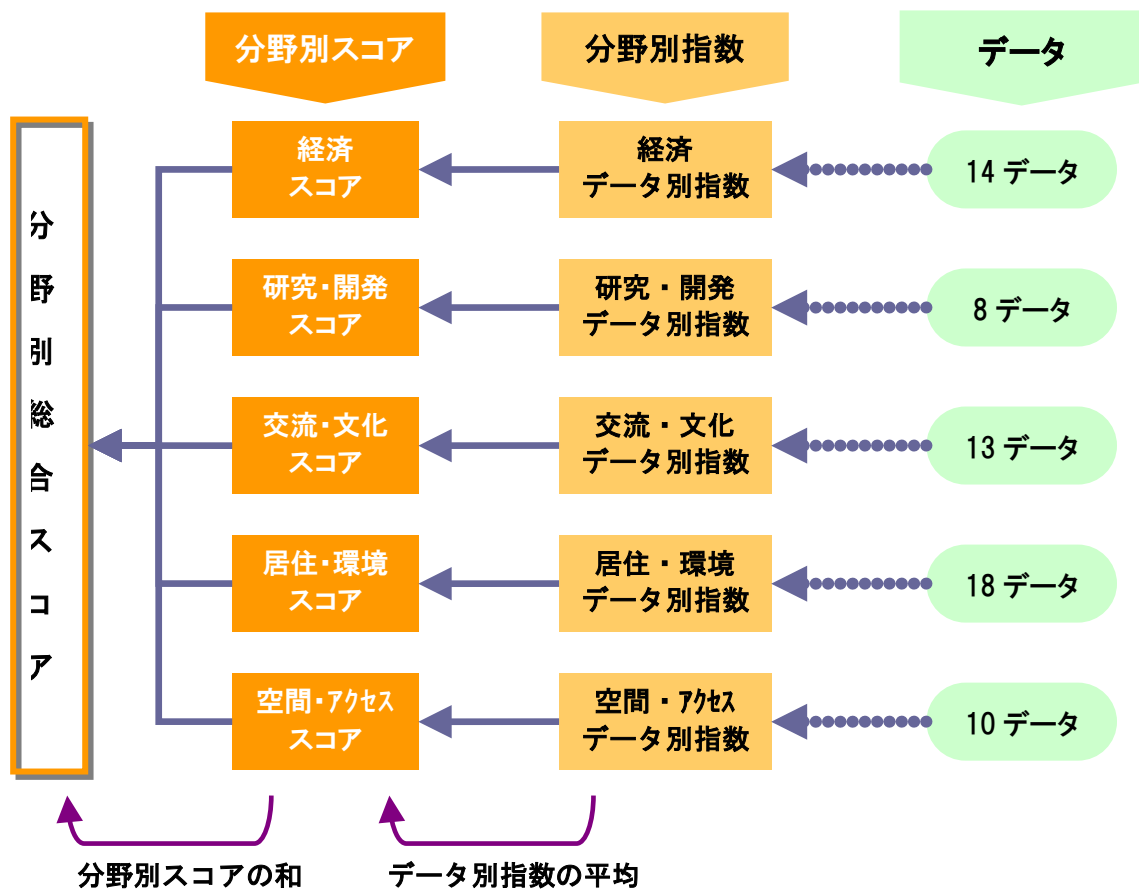


図 2-4 分野別ランキングの算出フロー

イ) アクター別スコア算出

- ・ まず、各アクターが都市を評価する上で重要視する要素を設定した。次にそれらの要素を説明する「指標」を全 63 指標の中から抽出し、アクター別の要素ごとに抽出した指標の平均値を要素スコアとして算出した。
- ・ この各要素のスコアに、アンケート調査で得られたそれぞれの要素に関連するウェイトを乗じた。
- ・ ウェイトを乗じた後、これら要素ごとの結果を合算し、アクター別のスコアを算出した。

下図は、「経営者」の場合の、アクター別ランキングのスコア算出フローである。その他のアクターも同様のフローにより、算出した。

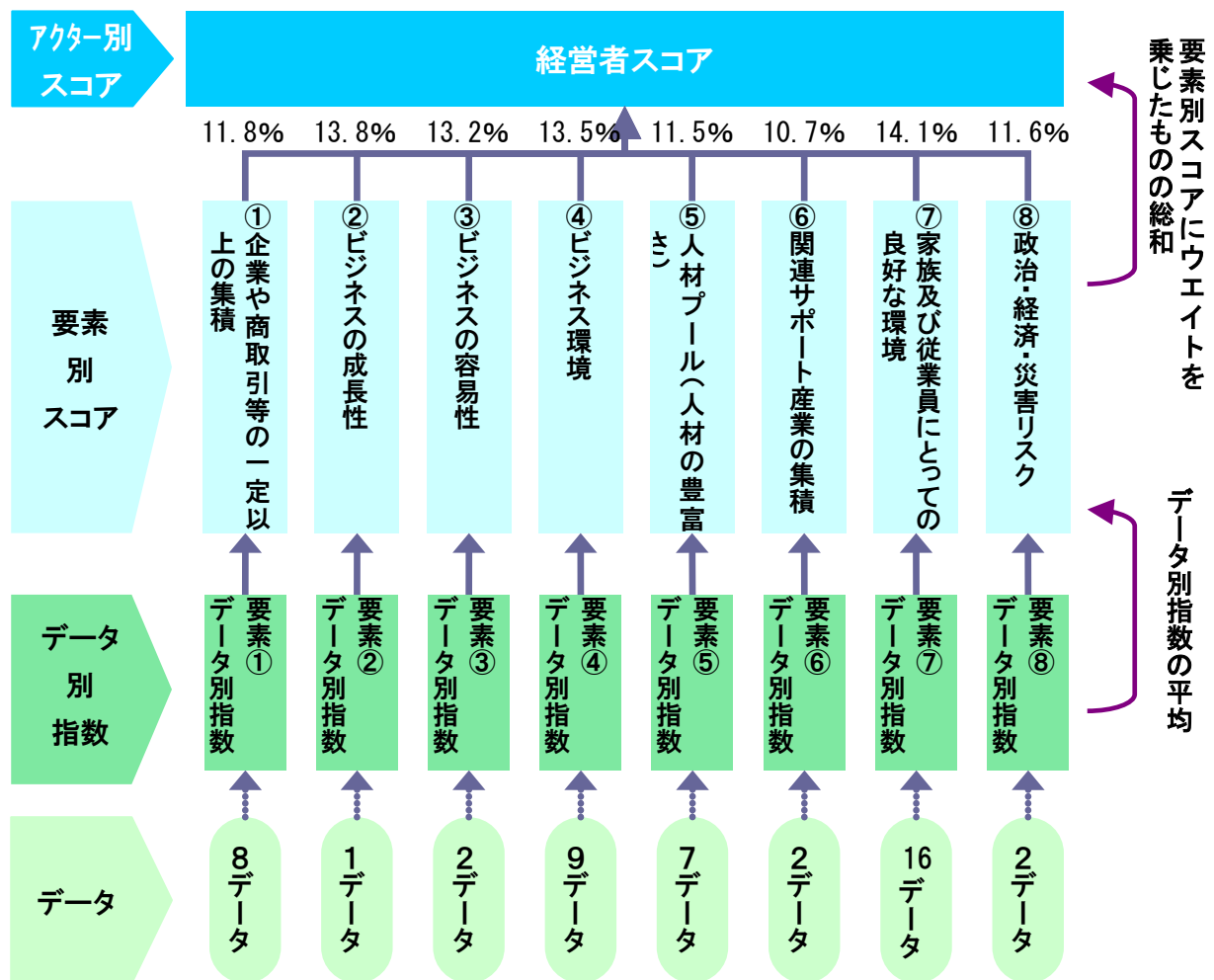


図 2-5 アクター別ランキングの算出フロー【経営者のケース】

表 2-2 要素別ウエイトの内訳

アクター	要素	ウエイト
経営者	①企業や商取引等の一定以上の集積	11.8%
	②ビジネスの成長性	13.8%
	③ビジネスの容易性	13.2%
	④ビジネス環境	13.5%
	⑤人材プール（人材の豊富さ）	11.5%
	⑥関連サポート産業の集積	10.7%
	⑦家族及び従業員にとっての良好な環境	14.1%
	⑧政治・経済・災害リスク	11.6%
研究者	①質の高い研究機関・研究者・指導者の存在	18.5%
	②研究機関や研究者の集積	14.5%
	③研究活動における発想や思考に対して刺激となる空間・機会の存在	16.3%
	④受入れ態勢（研究費助成や生活費補助など）	16.3%
	⑤自らの研究分野における就業機会	17.7%
	⑥日常生活の環境（住みやすさ）	16.8%
アーティスト	①文化的刺激	20.6%
	②アーティストの集積	17.6%
	③マーケットの存在	17.7%
	④創作環境（スタジオ、アトリエ賃料、広さなど）	21.5%
	⑤日常生活の環境（住みやすさ）	22.6%
観光客	①文化的魅力や接触機会	16.2%
	②安全	16.2%
	③観光の対象の存在（施設、文化等）	14.8%
	④一定水準以上の宿泊施設	14.3%
	⑤食事の選択肢や値段等	12.3%
	⑥買物する環境や値段、魅力等	10.4%
	⑦目的地までの移動の利便性（所要時間、運賃等）	15.7%
生活者	①購買環境（物価、商品の得やすさ等）	13.4%
	②生活環境（住環境などの日常の生活のしやすさ等）	15.6%
	③就業環境（収入、雇用機会等）	14.8%
	④教育環境	13.6%
	⑤余暇活動	12.8%
	⑥安全	14.8%
	⑦医療水準	14.9%

■ アンケートについて

定性的な評価を得るために、対象都市（世界 30 都市、選定の方法及び結果は次頁参照）に在住・在勤の方を対象に、ウェブアンケートを実施した。各都市で、数千から数万の人を対象にアンケート調査票を配信し、計 2,315 票の回答を得た。

アンケートは、各都市について原則としてアクター別に行い、これに基づいて以下の 11 指標を収集した。

- ・ 優秀な人材確保の容易性（分野：「経済」）
- ・ 外国人研究者の受け入れ体制（分野：「研究・開発」）
- ・ 研究交流機会の多さ・成果発信の活発さ（分野：「研究・開発」）
- ・ 商品の魅力・買物の環境に対する満足度（分野：「交流・文化」）
- ・ 食事の選択肢・値段等に対する満足度・魅力（分野：「交流・文化」）
- ・ 育成機関、発表機会、素材の入手等の創作活動の環境（分野：「交流・文化」）
- ・ 文化的な刺激、文化的魅力、及び芸術・文化への接触機会（分野：「交流・文化」）
- ・ 経営者からみた従業員の生活満足度（分野：「居住・環境」）
- ・ 近隣住民との良好な付き合い（分野：「居住・環境」）
- ・ 公共交通の定時性（分野：「空間・アクセス」）
- ・ 通勤・通学の所要時間（分野：「空間・アクセス」）

なお、アンケート結果については、前述のとおり、スコア化するにあたり、比重を定量指標の 2 分の 1 とした。また、アンケート回答の都市別の偏りを補正する係数を用いて、国民性等による回答傾向（自分の都市を比較的肯定的に捉える傾向の強い場合と、否定的に捉える傾向の強い場合）の差異を可能な限り除外するようにした。

3. 30 都市の選定方法

本調査で対象としたのは、世界 30 都市である。

この 30 都市は、世界各国の代表的な都市の中から、以下の基準により抽出した。

- 【選定基準①】 有力な既存都市比較ランキング（“The Global Financial Centres Index”, “Worldwide Centers of Commerce Index”, “Cities of Opportunity”）によりベスト 10 以内に入っている都市
- 【選定基準②】 有力な国際競争力ランキング（‘World Economic Forum’, ‘IMD’）において競争力ベスト 10 以内に入っている国の主要都市
- 【選定基準③】 本ランキングを検討している委員会メンバーから対象都市として取り上げることが適切として挙げられた都市

以上の基準をふまえて選定したのが、次頁表に示した 30 都市である。地域別にみると、アジア（シドニー含む）から 11 都市、欧州（モスクワ含む）から 13 都市、北米（トロント含む）から 6 都市の計 30 都市である。

表 3-1 対象とした 30 都市の一覧

地域	国	都市	選定基準		
			①	②	③
アジア・オセアニア	タイ	バンコク			○
	中国	北京		○	
	中国	香港	○	○	
	マレーシア	クアラルンプール			○
	インド	ムンバイ			○
	韓国	ソウル	○		
	中国	上海	○	○	
	シンガポール	シンガポール	○	○	
	オーストラリア	シドニー	○		
		台北			○
	日本	東京	○	○	
ヨーロッパ	オランダ	アムステルダム		○	
	ドイツ	ベルリン		○	
	ベルギー	ブリュッセル			○
	デンマーク	コペンハーゲン		○	
	ドイツ	フランクフルト	○	○	
	スイス	ジュネーブ	○	○	
	イギリス	ロンドン	○	○	
	スペイン	マドリッド			○
	イタリア	ミラノ			○
	ロシア	モスクワ			○
	フランス	パリ	○		
	オーストリア	ウィーン			○
	スイス	チューリヒ	○	○	
北米	アメリカ	ボストン		○	
	アメリカ	シカゴ	○	○	
	アメリカ	ロサンゼルス	○	○	
	アメリカ	ニューヨーク	○	○	
	アメリカ	サンフランシスコ	○	○	
	カナダ	トロント	○	○	



图 3-1 对象 30 都市

4. 結果の概要

(1) 分野別総合ランキング

分野別総合ランキングのトップ3はニューヨーク、ロンドン、パリである。
東京は4位であるが、トップ3とは点差にかなりの開きがある。

分野別総合ランキングを見ると、ニューヨーク、ロンドンが突出しており、次いでパリが位置し、このトップ3が250点を超えている。東京は総合ランク4位ながらも、スコアではトップ3（ニューヨーク、ロンドン、パリ）にかなりの点差をつけられている。

第5位のウィーン、第6位のベルリンは第2集団の中で高い位置にランクされるが、それ以降の都市は僅差で並んでいる。

経済成長著しいアジアの新興勢力の諸都市は、調査対象の30都市の中では、比較的下位に並んでおり、総合力という視点ではまだまだ成長途上であると言える。

総合スコアから見た東京は、世界の都市のトップ集団最後方に位置する都市であるともいえ、200点前後に多くの都市がひしめく第2グループのトップに位置する都市であるともいえる。

スコア

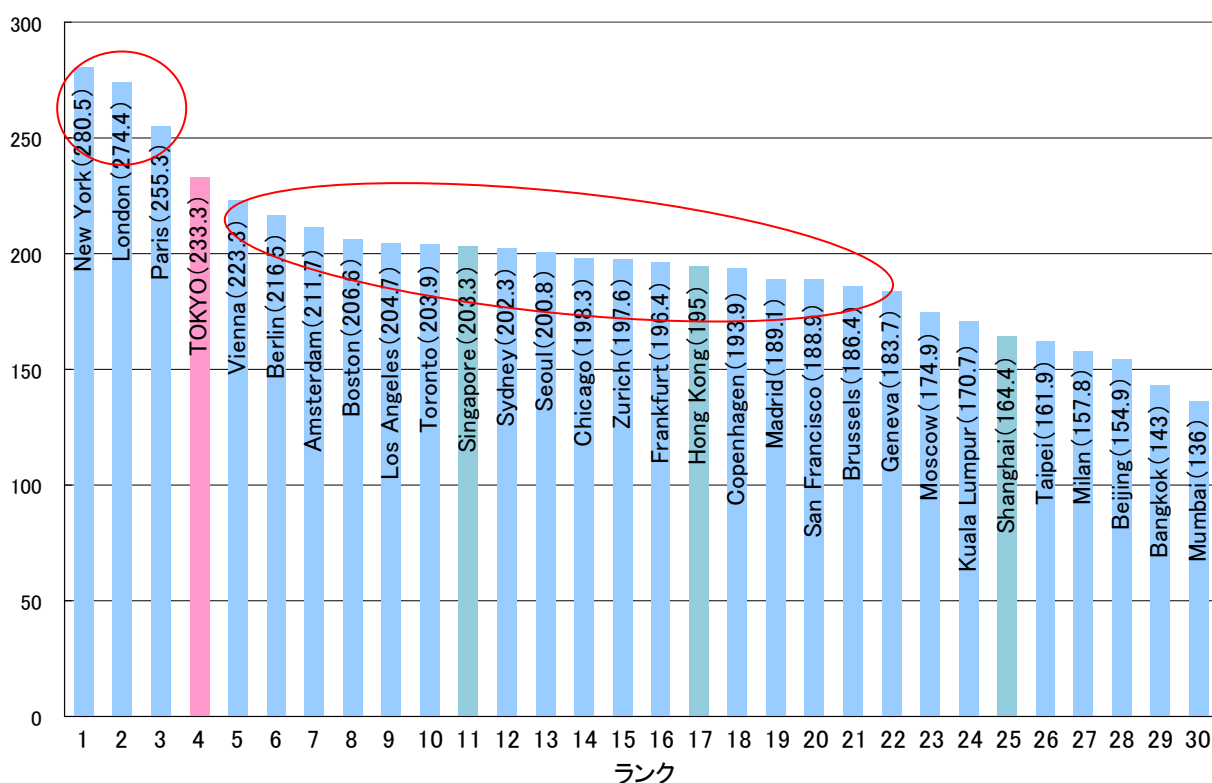


図 4-1 分野別総合ランキングの結果

(2) 分野別ランキング

「居住・環境」分野及び、「空間・アクセス」分野におけるフランクフルト、アムステルダムやベルリンなど、総合ランクが下位でも特定の分野では上位にランクされ、優位性を発揮する都市が存在する。

分野別ランキングで見ると、各都市の強みはそれぞれ異なり、特定の分野で優位性を発揮する都市が存在する。

例えば「居住・環境」「空間・アクセス」の分野ではフランクフルト（総合ランク 16 位）、コペンハーゲン（総合ランク 18 位）、チューリヒ（総合ランク 15 位）というように総合ランク 10 位以下の欧州の都市がトップ 5 に位置している。それに対して、総合ランクトップ 3 の都市はこの 2 分野では比較的下位に位置している。（23 ページ表参照）

アジアには「経済」分野に特化した都市が多い一方で、欧州には「交流・文化」「居住・環境」「空間・アクセス」分野で上位にランクされている都市が多い。

地域別に見ると、アジアの諸都市は、「経済」分野で上位にランクされている。総合ランク上位に位置しない北京（総合ランク 28 位）、香港（総合ランク 17 位）、上海（総合ランク 25 位）が、「経済」分野ではそれぞれ、4 位、5 位、6 位と上位にランクしているのが特徴的である。

一方、欧州の諸都市は、「交流・文化」「居住・環境」「空間・アクセス」分野で上位 10 位以内にランクされている都市の数が 6 割前後を占めている。

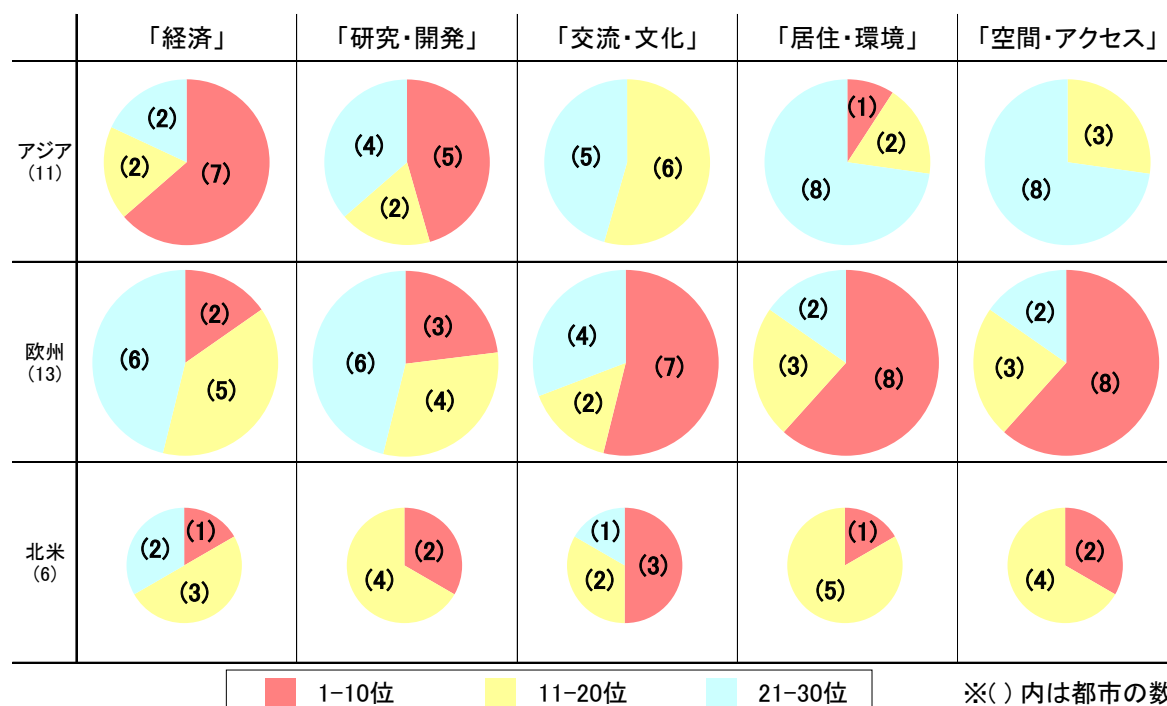


図 4-2 分野別ランキングにおいて各地域の中でそれぞれの範囲にランクされた都市数

以上を概観すると、アジアの都市には「経済」に特化した強みを発揮する都市が多く、一方で欧州の都市には「居住・環境」「空間・アクセス」分野で強みを発揮する都市が多くみられる。

表 4-1 分野別ランキング結果

ランク	分野別総合		「経済」		「研究・開発」		「交流・文化」		「居住・環境」		「空間・アクセス」	
1	New York	280.5	New York	54.2	TOKYO	63.9	London	65.3	Frankfurt	79.9	Paris	58.6
2	London	274.4	London	53.3	New York	62.3	Paris	50.8	Berlin	79.3	Frankfurt	51.3
3	Paris	255.3	TOKYO	52.0	London	50.5	New York	49.8	Vienna	78.4	Amsterdam	50.7
4	TOKYO	233.3	Beijing	47.3	Seoul	50.4	Vienna	37.0	Copenhagen	77.3	New York	46.3
5	Vienna	223.3	Hong Kong	46.6	Los Angeles	43.1	Berlin	34.6	Zurich	76.8	Copenhagen	42.1
6	Berlin	216.5	Shanghai	45.7	Sydney	38.2	Los Angeles	29.8	Paris	76.8	Toronto	42.0
7	Amsterdam	211.7	Singapore	42.0	Hong Kong	36.6	Madrid	29.3	Geneva	76.7	Zurich	40.6
8	Boston	206.6	Geneva	41.6	Singapore	36.2	Moscow	28.8	Boston	76.2	Brussels	40.4
9	Los Angeles	204.7	Kuala Lumpur	40.5	Berlin	35.9	Boston	27.4	Sydney	75.3	London	40.3
10	Toronto	203.9	Mumbai	39.8	Moscow	34.5	Amsterdam	26.1	Madrid	75.2	Geneva	39.9
11	Singapore	203.3	Seoul	39.3	Vienna	33.6	Chicago	25.7	Toronto	74.2	Vienna	38.9
12	Sydney	202.3	Paris	38.9	Taipei	32.3	Brussels	24.9	Amsterdam	74.2	Boston	38.6
13	Seoul	200.8	Copenhagen	38.8	Paris	30.2	Sydney	24.7	Brussels	74.2	Berlin	37.7
14	Chicago	198.3	Sydney	38.2	Toronto	29.0	TOKYO	24.4	San Francisco	72.8	Chicago	35.1
15	Zurich	197.6	Zurich	37.7	Chicago	29.0	Beijing	24.3	Chicago	72.5	Madrid	35.1
16	Frankfurt	196.4	Los Angeles	36.7	Boston	27.9	Hong Kong	24.1	Singapore	71.2	San Francisco	35.0
17	Hong Kong	195.0	Boston	36.5	Amsterdam	27.8	Toronto	23.3	Kuala Lumpur	71.0	Seoul	33.4
18	Copenhagen	193.9	Moscow	36.4	Zurich	26.2	Frankfurt	22.6	Milan	70.0	Singapore	33.0
19	Madrid	189.1	Chicago	36.0	San Francisco	25.2	Seoul	22.6	New York	67.8	Hong Kong	32.4
20	San Francisco	188.9	Vienna	35.5	Shanghai	22.3	Shanghai	22.1	Los Angeles	65.7	Los Angeles	29.3
21	Brussels	186.4	Toronto	35.4	Geneva	18.5	Singapore	20.9	TOKYO	65.6	Kuala Lumpur	28.5
22	Geneva	183.7	San Francisco	35.3	Frankfurt	18.5	San Francisco	20.7	London	64.9	Taipei	27.4
23	Moscow	174.9	Bangkok	34.0	Copenhagen	18.4	Milan	19.9	Taipei	60.9	TOKYO	27.3
24	Kuala Lumpur	170.7	Madrid	33.6	Beijing	18.3	Copenhagen	17.2	Bangkok	60.3	Milan	27.0
25	Shanghai	164.4	Amsterdam	33.1	Brussels	18.2	Zurich	16.4	Shanghai	57.4	Moscow	26.5
26	Taipei	161.9	Taipei	33.0	Kuala Lumpur	16.9	Bangkok	15.1	Mumbai	55.5	Sydney	26.0
27	Milan	157.8	Berlin	29.1	Madrid	15.9	Kuala Lumpur	13.8	Hong Kong	55.2	Bangkok	22.3
28	Beijing	154.9	Brussels	28.7	Milan	15.3	Mumbai	13.1	Seoul	55.2	Mumbai	18.0
29	Bangkok	143.0	Milan	25.5	Bangkok	11.2	Taipei	8.3	Beijing	49.6	Shanghai	16.9
30	Mumbai	136.0	Frankfurt	24.1	Mumbai	9.6	Geneva	7.0	Moscow	48.7	Beijing	15.4

 分野別総合
 ランクトップ5
 アジアの
 主要経済都市

(3) アクター別ランキング

都市活動の表舞台で活躍する4つのグローバルアクター、都市生活者、いずれのアクターの視点からみても魅力的といえる都市はニューヨーク、ロンドン、パリである。これらの都市は、総合スコアでも他の都市を引き離しており、オールマイティな魅力を備えた都市である。

分野別総合ランキングでトップ3の都市（ニューヨーク、ロンドン、パリ）と4位（東京）、5位（ウィーン）以下の都市には総合スコアで大きな差があるが、**アクター別に見てもトップ3の都市と東京はじめ4位以下の都市では大きな差がある。**

総合スコアで他の都市を引き離しているトップ3の都市（ロンドン、ニューヨーク、パリ）は、いずれのアクターからみた場合でも、少なくとも5位以内にランクされている。しかも、パリが「経営者」で5位、「研究者」で4位であることを除き、すべてのアクターでベスト3にランキングされている。つまり、**5つのアクターの視点からみた評価がいずれも高いオールマイティな都市がトップ3にランクされた都市であるといえる。**

アジアの都市は「経営者」を除く各アクターにとって、30都市中21位以下にランクされる都市数が5割以上を占め、特に「生活者」の視点からの評価が著しく低い都市が多い。

地域別に見ると、ベスト10にランクされた都市の割合は、「アーティスト」及び「観光客」では、北米の都市が多くを占め、「経営者」及び「生活者」では欧州が比較的多くを占めている。一方、「研究者」では地域による大きな差異はみられない。

北米の都市は、大半が20位以内にランクしているのに対して、アジアの都市は、「経営者」を除き21位以下の都市の割合が5割以上となっている。分野別に比べて、**アクター別ランキングでは、北米、欧州が優位であり、アジアの都市は下位に位置する都市が多い。**

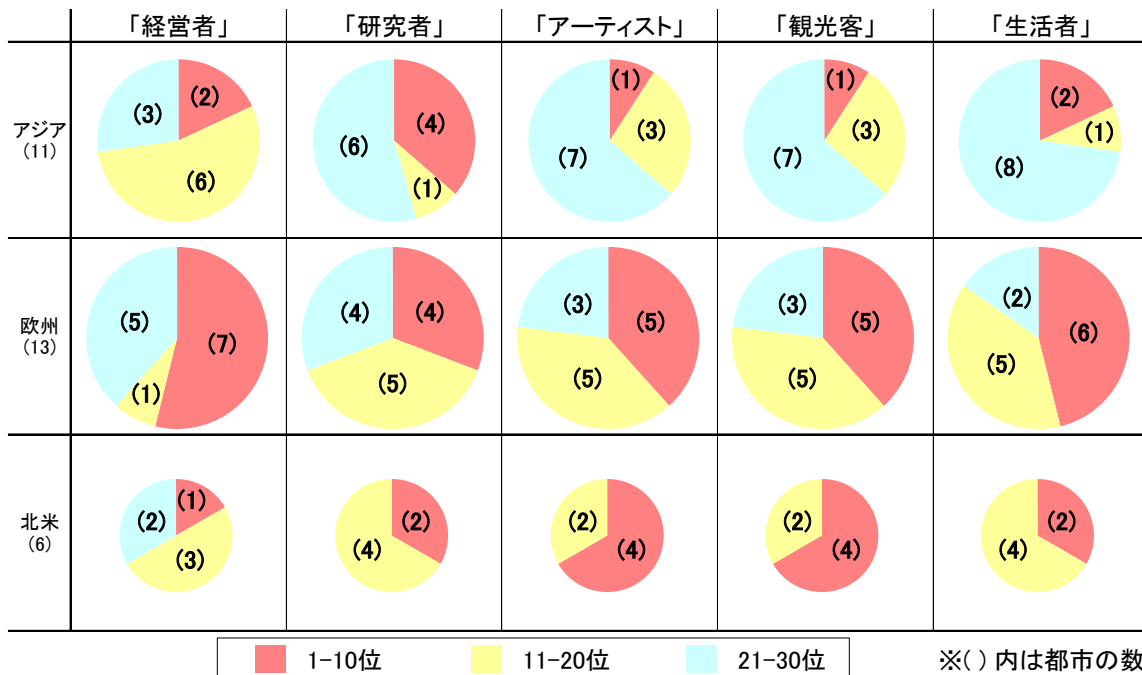


図 4-3 アクター別ランキングにおいて各地域の中でそれぞれの範囲にランクされた都市数

表 4-2 アクター別ランキング結果

ランク	「経営者」		「研究者」		「アーティスト」		「観光客」		「生活者」	
1	London	59.8	New York	63.6	New York	64.1	London	65.2	Paris	65.2
2	New York	55.6	London	61.8	London	59.1	New York	64.8	New York	64.9
3	Singapore	54.7	TOKYO	55.0	Paris	54.2	Paris	59.6	London	62.7
4	Hong Kong	53.9	Paris	45.8	Berlin	52.1	Boston	54.7	Vienna	61.9
5	Paris	49.9	Los Angeles	44.3	Vienna	46.2	Vienna	53.6	Berlin	61.9
6	Geneva	47.4	Vienna	42.8	Los Angeles	46.0	Amsterdam	50.9	Zurich	61.7
7	Vienna	47.1	Seoul	40.9	TOKYO	43.1	Chicago	50.3	TOKYO	61.6
8	Amsterdam	47.0	Singapore	40.1	Chicago	43.1	Hong Kong	48.2	Boston	60.8
9	Copenhagen	46.7	Sydney	39.8	Boston	41.5	Toronto	47.6	Sydney	60.5
10	Zurich	46.7	Berlin	39.5	Moscow	39.4	Brussels	47.5	Copenhagen	60.3
11	Sydney	46.1	Moscow	37.0	Madrid	38.7	Madrid	46.8	Toronto	60.0
12	Boston	45.6	Chicago	36.9	Amsterdam	38.7	Copenhagen	46.7	Chicago	59.8
13	Toronto	45.1	Boston	35.3	Kuala Lumpur	37.3	Berlin	46.2	Geneva	59.5
14	TOKYO	44.1	Zurich	33.1	Toronto	37.2	Singapore	46.0	Amsterdam	59.4
15	Kuala Lumpur	43.5	Hong Kong	32.3	San Francisco	37.2	Los Angeles	45.5	Frankfurt	58.1
16	Chicago	43.0	Amsterdam	31.6	Frankfurt	36.4	Frankfurt	44.8	Brussels	57.8
17	Seoul	42.4	San Francisco	30.6	Shanghai	35.9	Milan	44.5	Singapore	57.2
18	Madrid	42.4	Copenhagen	30.4	Zurich	35.9	Kuala Lumpur	44.4	San Francisco	57.0
19	Beijing	42.4	Toronto	29.8	Brussels	35.1	Sydney	44.3	Los Angeles	56.1
20	Shanghai	41.9	Geneva	28.4	Singapore	35.0	San Francisco	42.8	Madrid	55.8
21	Brussels	41.5	Taipei	28.1	Milan	33.5	Zurich	42.6	Kuala Lumpur	54.5
22	Los Angeles	41.2	Shanghai	26.5	Bangkok	33.2	Seoul	40.7	Hong Kong	53.1
23	Moscow	39.9	Beijing	26.3	Sydney	33.0	TOKYO	40.7	Shanghai	52.4
24	Frankfurt	39.4	Brussels	26.0	Copenhagen	31.0	Shanghai	39.9	Seoul	51.8
25	Berlin	39.1	Madrid	25.2	Beijing	31.0	Beijing	39.4	Milan	50.7
26	San Francisco	38.3	Milan	23.9	Seoul	30.3	Geneva	39.4	Beijing	49.6
27	Mumbai	36.9	Frankfurt	23.0	Geneva	30.0	Bangkok	39.2	Taipei	49.3
28	Taipei	36.7	Bangkok	21.5	Hong Kong	29.9	Moscow	37.5	Mumbai	43.2
29	Bangkok	34.2	Kuala Lumpur	20.5	Taipei	29.2	Taipei	33.5	Bangkok	43.1
30	Milan	33.7	Mumbai	17.2	Mumbai	28.4	Mumbai	30.0	Moscow	40.4

分業別総合
ランクトップ5

分業別総合
ランクトップ3

アジアの
主要経済都市

(4) 分野別ランキングとアクター別ランキングの関係

GDPや企業集積などの「経済」指標が高い都市が、必ずしも「経営者」の視点からみて魅力的な都市ばかりであるとは限らない。

表 4-3 各都市の「経済」と「経営者」の関係

「経済」のランクと「経営者」のランクが高く共にトップ 10 にランクされている都市が、ロンドン、ニューヨーク、ジュネーブ、アジアではシンガポールと香港である。これらの都市は、GDP や企業集積などの「経済」指標が高い一方で、「経営者」の視点からみて魅力のある都市である。

しかし、東京、クアラルンプール、北京、上海等のアジア諸都市は、分野別の「経済」でトップ 10 にランクされているにもかかわらず、「経営者」の視点からは上位にはランクされず、14 位以下となっている。これらの都市は「経営者」が重視する指標のうち、「経済」指標以外のものが劣っていることを示している。一方、「経済」ランクは比較的下位であるものの「経営者」は上位に来ている例がパリやウィーンである。

「経済」も「経営者」もトップ10

	「経済」		「経営者」	
	ランク	スコア	ランク	スコア
London	2	53.3	1	59.8
New York	1	54.2	2	55.6
Singapore	7	42.0	3	54.7
Hong Kong	5	46.6	4	53.9
Geneva	8	41.6	6	47.4

「経済」はトップ10だが「経営者」は11位以下

	「経済」		「経営者」	
	ランク	スコア	ランク	スコア
TOKYO	3	52.0	14	44.1
Kuala Lumpur	9	40.5	15	43.5
Beijing	4	47.3	19	42.4
Shanghai	6	45.7	20	41.9
Mumbai	10	39.8	27	36.9

「経済」は11位以下だが「経営者」はトップ10

	「経済」		「経営者」	
	ランク	スコア	ランク	スコア
Paris	12	38.9	5	49.9
Vienna	20	36.0	7	47.1
Amsterdam	25	33.1	8	47.0
Copenhagen	13	38.8	9	46.7
Zurich	15	37.7	10	46.7

各都市における、アクター別の「スコア」と、そのアクターと関連性が深いと考えられる分野の「スコア」との関連を相関係数で示した。またアクター別の各都市の「スコア」と、総合「スコア」の関連について、「総合スコア」と各「スコア」の相関係数について示したものが以下の表である。

各都市の各アクターの「スコア」と「総合スコア」の相関係数はいずれも 0.7 以上と高い相関を示している。つまり、各アクターにとって「スコア」の高い都市は「総合スコア」も高い。

一方、各都市の各アクターの「スコア」と、そのアクターと関連性が深いと考えられる分野の「スコア」との相関をみたところ、それぞれに高い相関係数が得られたが、「経営者」と「経済」の相関係数が 0.66 と、他の 4 アクター・分野よりも低い結果となった。

表 4-4 アクターと分野・アクターと総合スコアの相関

アクター	関連性が深いと思われる分野	両者の相関係数	アクターと総合スコアとの相関係数
「経営者」	「経済」	0.66	0.75
「研究者」	「研究・開発」	0.91	0.89
「アーティスト」	「交流・文化」	0.88	0.84
「観光客」	「交流・文化」	0.84	0.85
「生活者」	「居住・環境」	0.76	0.80

そこで、主な都市の「経済」と「経営者」のランクとスコアの関係について上記でまとめた。

(5) 東京と総合ランクトップ3都市（ニューヨーク、ロンドン、パリ）との比較

東京は、分野別では「交流・文化」「空間・アクセス」が著しく劣っている。アクター別では、「生活者」の視点からは他都市に比肩する評価を得られているが、その他のアクターの視点からみた評価は低く、特に「経営者」と「観光客」の視点からみた評価ではトップ3都市から大きく引き離されている。

まず、分野別のスコアをみると、ニューヨークとロンドンがあまねく各要素で高い評価を得ている一方で、パリは「経済」と「研究・開発」、東京は「交流・文化」と「空間・アクセス」がトップ3の都市と比較して評価が極めて低い。

パリは「居住・環境」や「空間・アクセス」の分野において、ニューヨークやロンドンを凌ぐほど高い評価を得ている。それに対して東京は、「経済」「研究・開発」及び「居住・環境」でもニューヨークやロンドンと同レベルであり、トップ3を大きく上回る評価を得ている分野はない。

アクター別にみても、ニューヨークとロンドンの両都市の強さが際立っており、すべてのアクターの視点からみて最上級の評価を得ている。これに対してパリは「生活者」の視点からの評価が両都市より若干高い。

一方東京は、「生活者」の視点からは他都市に比肩する評価となっているが、特に「経営者」と「観光客」の視点からみた評価が低くトップ3都市から大きく引き離されている。

なお、「アーティスト」の視点からみた評価もトップ3都市に負けているが、ランクでは上位（7位）である。

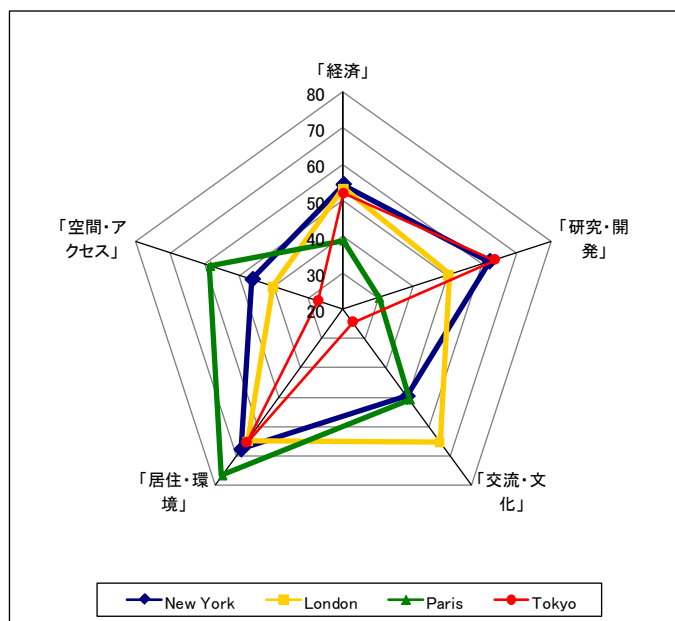


図 4-4 トップ3と東京の比較（分野別）

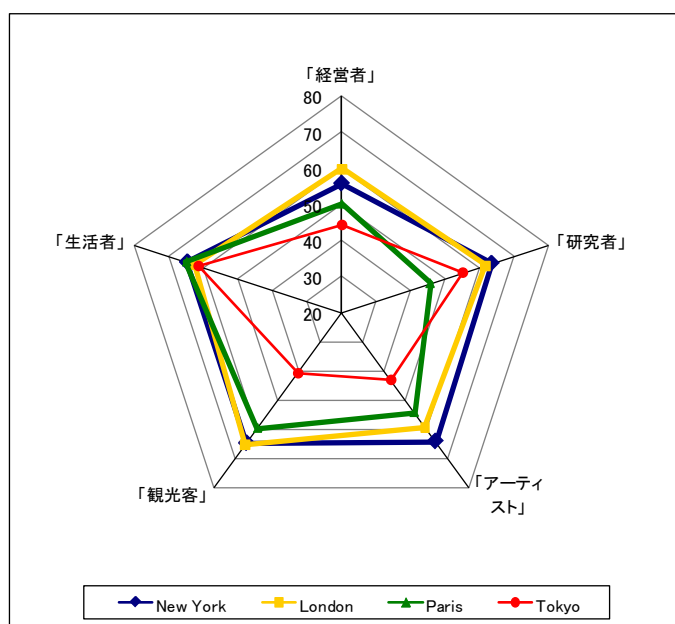


図 4-5 トップ3と東京の比較（アクター別）

(6) 東京とアジア主要経済都市との比較

東京はアジアの他の主要経済都市と比較して、「研究・開発」の分野は極めて優位性があるが、「居住・環境」や「空間・アクセス」ではアジアの諸都市に比べて特に優位性があるわけではない。

アクター別にみても「研究者」の視点からみた評価は高いものの、「経営者」や「観光客」の視点からみた評価はアジアの中でも低い方である。

アジアの主要な経済都市であるシンガポール、上海、香港の3都市と東京について、分野別及びアクター別にスコアの比較を行った。

まず分野別にみると、「研究・開発」を除く各要素では、この4都市の中で最も高いスコアと低いスコアの差は大きくて20ポイント前後である。「研究・開発」ではそれを遙かに上回る50ポイントあまりの差がついており、4都市の中で著しい評価のばらつきがみられる。

東京は、「研究・開発」で高評価を得て他の諸都市を引き離しているほか、「経済」「交流・文化」で最高水準の評価を得ている。一方、「居住・環境」や「空間・アクセス」ではアジアの諸都市に比べて必ずしも優位性を発揮しているわけではない。

次にアクター別にみると、「研究者」の視点からみた評価のばらつきが最も大きく、「観光客」や「生活者」のばらつきは比較的小さくなっている。

東京は、「研究者」「アーティスト」及び「生活者」の視点からみた評価がこのアジア4カ国の中では最も高い。一方で、「経営者」「観光客」の視点からみた評価はアジアの主要経済都市の中では相対的に低い方である。

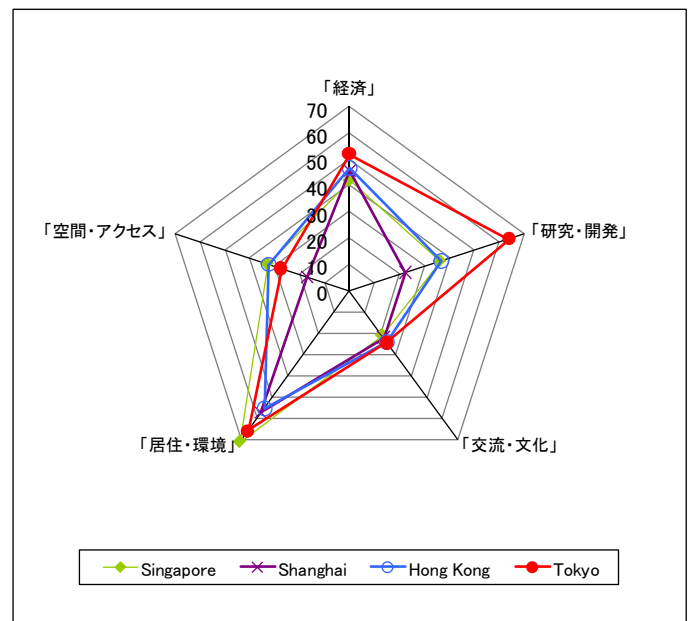


図 4-6 アジア都市と東京の比較（分野別）

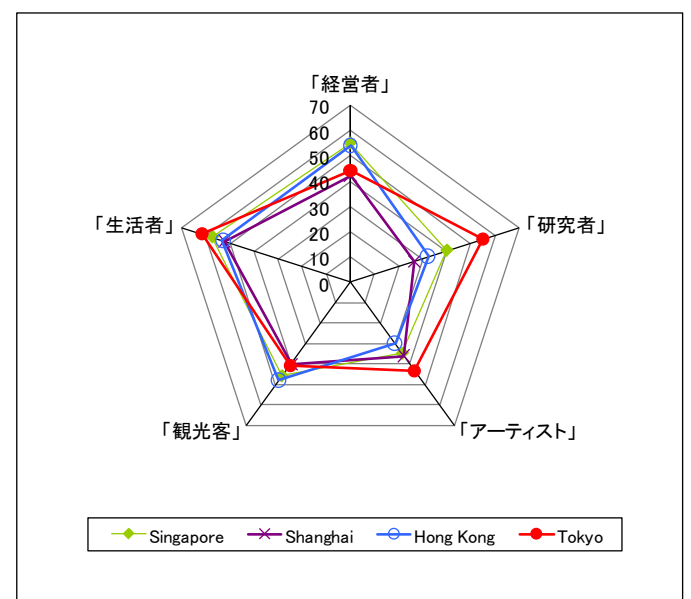


図 4-7 アジア都市と東京の比較（アクター別）

(7) 東京と BRICs 諸国内の 5 都市との比較

東京は、成長著しい(B)RICs の諸都市と比較して、「経済」「研究・開発」「居住・環境」の分野において優位性が認められる。ただし「経済」は香港、上海とはスコアが接近しており、必ずしも高い優位性を持っているわけではない。
アクター別にみると、香港は、「経営者」、「観光客」では東京を上回っている。

成長著しい新興経済諸国として、BRICs、すなわちブラジル、ロシア、インド、中国が注目されるようになって数年が経過した。今回の対象都市の中にはブラジルの都市が含まれていないが、その他の BRICs 都市がどのような結果となったか、以下にまとめた。

該当する都市は、モスクワ、ムンバイ、北京、上海、香港の 5 都市である。

まず、分野別スコアの合計では、下表に示したとおり、香港が 17 位となったものの、その他の都市はいずれも 23 位以下と、比較的低い評価となった。

分野別の評価を東京と比較しながら各要素別にみると、東京には及ばないものの、香港とモスクワは比較的似た傾向を示しており、BRICs の都市の中では比較的安定したスコアをどの要素でも獲得している。特に香港は、「空間・アクセス」において東京を凌ぎ、モスクワは「交流・文化」で東京を上回っている。

表 4-5 BRICs の 5 都市の総合スコア及び順位

都市名	スコア	総合順位
香港	195.0	17 位
モスクワ	174.9	23 位
上海	164.4	25 位
北京	154.9	28 位
ムンバイ	136.0	30 位

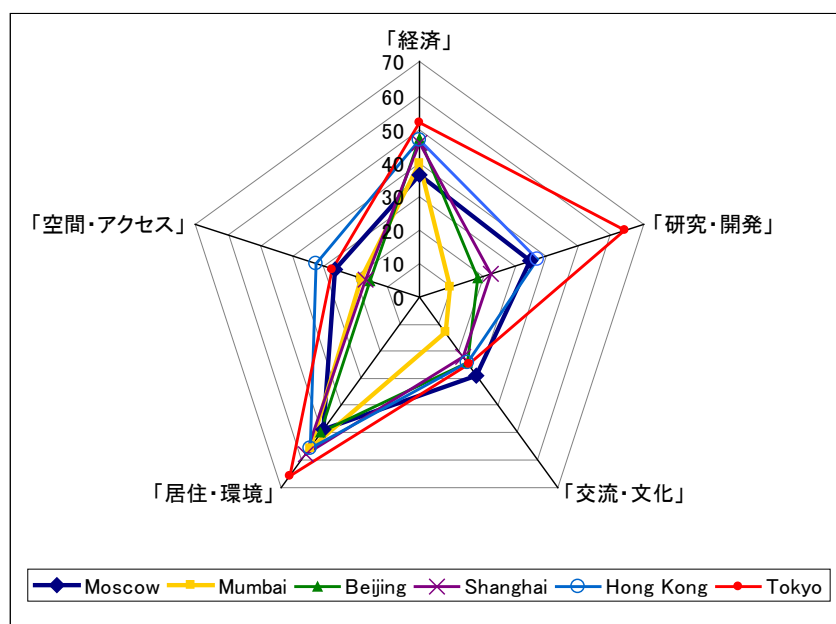


図 4-8 BRICs 諸国内の 5 都市と東京の比較 (分野別)

アクター別の視点からみた評価を東京と比較しながら各要素別にみると、香港は特に「経営者」と「観光客」の視点からみた評価が高く、両者は東京の評価をも上回っている。また、香港は、東京には及ばないものの、「生活者」の視点からみた評価も高くなっている。逆に、「研究者」及び「アーティスト」の視点からみた評価が低いことが香港の特徴である。一方モスクワは、「研究者」と「アーティスト」の視点からみた評価は比較的高く、「生活者」の視点からみた評価は低いという、香港とは対照的な傾向を示している。

その他の、上海、北京、ムンバイの3都市は、概ねどのアクターでみてもこの順番で評価されているが、「研究者」「観光客」の視点からみたムンバイの低評価が際立っている。

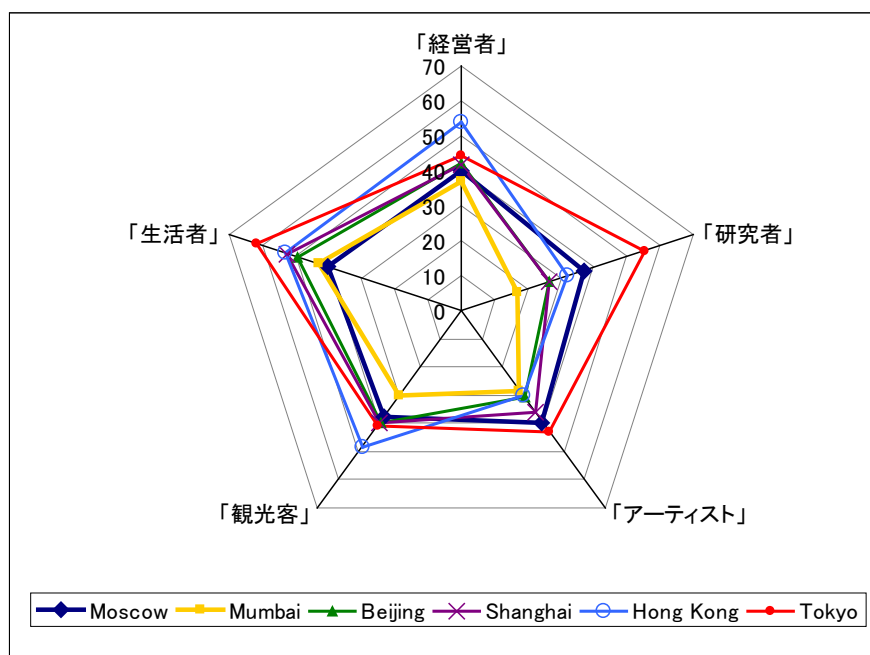


図 4-9 BRICs 諸国内の 5 都市と東京の比較 (アクター別)

5. 個別結果

(1) 分野別の個別結果

1) 経済

分野別の各都市の「経済」スコアと、総合スコアの関連をみると、総合でベスト5にランクされた都市のうち、ニューヨーク、ロンドン、東京は非常に高い評価となっている一方で、パリとウィーンは30都市中の平均以下の値であった。

平均値と比べた上下で傾向をみると、下表にあげたように、総合スコアと「経済」スコアでそれぞれの指標の傾向が平均以上、平均未満と一致した都市数は14で、約半数であった。

総合スコアは低く（平均未満）でも、「経済」面で平均以上の評価となった都市が、7都市あり、うち5都市がアジアの都市（香港、北京、上海、ムンバイ、クアラルンプール）、2都市が欧州の都市（ジュネーブ、コペンハーゲン）であった。

「経済」スコアと各分野の合計値である総合スコアとの関係を図化すると、以降で分析するその他の分野と比較して、ややばらつきが大きい傾向がみられる。このことは、「経済」面での強さが総合的な強さに必ずしも結びついていないことがうかがえる。

表 5-1 総合と「経済」各スコアの平均以上・未満の都市数

		総合スコア (平均: 197.0)		
		平均未満	平均以上	計
経済スコア (平均: 38.3)	平均以上	7	6	13
	平均未満	8	9	17
	計	15	15	30

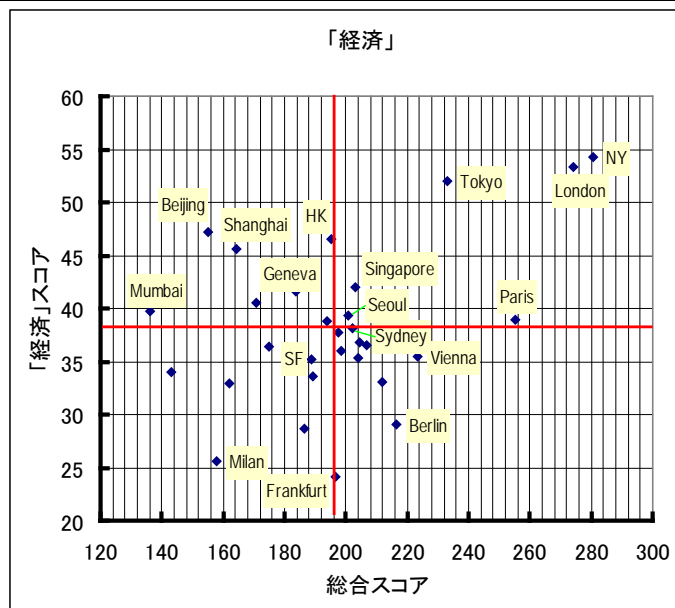


図 5-1 総合と「経済」各スコアによる都市分布

2) 研究・開発

分野別の各都市の「研究・開発」スコアと、総合スコアの関連をみると、総合でベスト5にランクされた都市のうち、ニューヨーク、ロンドン、東京は非常に高い評価となっており、パリとウィーンは30都市中の平均以上ではあるが、総合スコアで下位の都市に逆転されるケースが目立つ。

平均値と比べた上下で傾向をみると、下表にあげたように、総合スコアと「研究・開発」スコアでそれぞれのスコアの傾向が平均以上、平均未満と一致した都市数は22で、「経済」スコアでの同様の都市数が約半数であったのに対し、全体(30都市)の約3分の2となっている。

「研究・開発」スコアと各分野の合計値である総合スコアとの関係を図化すると、その他の分野と比較して、ばらつきはやや少なく、「研究・開発」面での強さが総合的な強さに結びつく傾向がうかがえる。

表 5-2 総合と「研究・開発」各スコアの平均以上・未満の都市数

		総合スコア (平均: 197.0)		
		平均未満	平均以上	計
研究・開発 スコア (平均: 29.9)	平均以上	3	10	13
	平均未満	12	5	17
	計	15	15	30

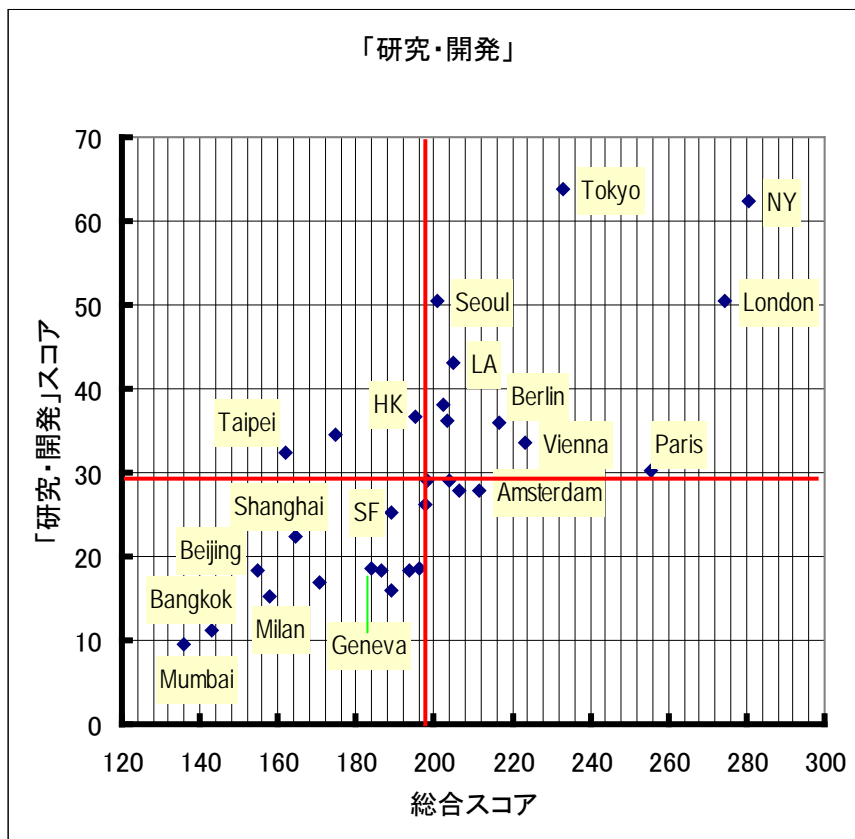


図 5-2 総合と「研究・開発」各スコアによる都市分布

3) 交流・文化

分野別の各都市の「交流・文化」スコアと、総合スコアの関連をみると、総合でベスト5にランクされた都市のうち、ニューヨーク、ロンドン、パリの3都市は非常に高く評価されており、ウィーンもこれらに次ぐ評価になっている一方で、東京は平均未満のスコアとなっている。

平均値と比べた上下で傾向をみると、下表にあげたように、総合スコアと「交流・文化」スコアでそれぞれの指標の傾向が平均以上、平均未満と一致した都市数は22で「研究・開発」スコアと同様、全体(30都市)の約3分の2となっている。

「交流・文化」のスコアと各分野の合計値である総合スコアとの関係を図化すると、その他の分野と比較して、ばらつきはやや少なく、「交流・文化」面での強さが総合的な強さに結びつく傾向がうかがえ、ばらつきは「研究・開発」よりもさらに少なくなっている。

表 5-3 総合と「交流・文化」各スコアの平均以上・未満の都市数

		総合スコア (平均: 197.0)		
		平均未満	平均以上	計
交流・文化 スコア (平均: 25.7)	平均以上	2	9	11
	平均未満	13	6	19
	計	15	15	30

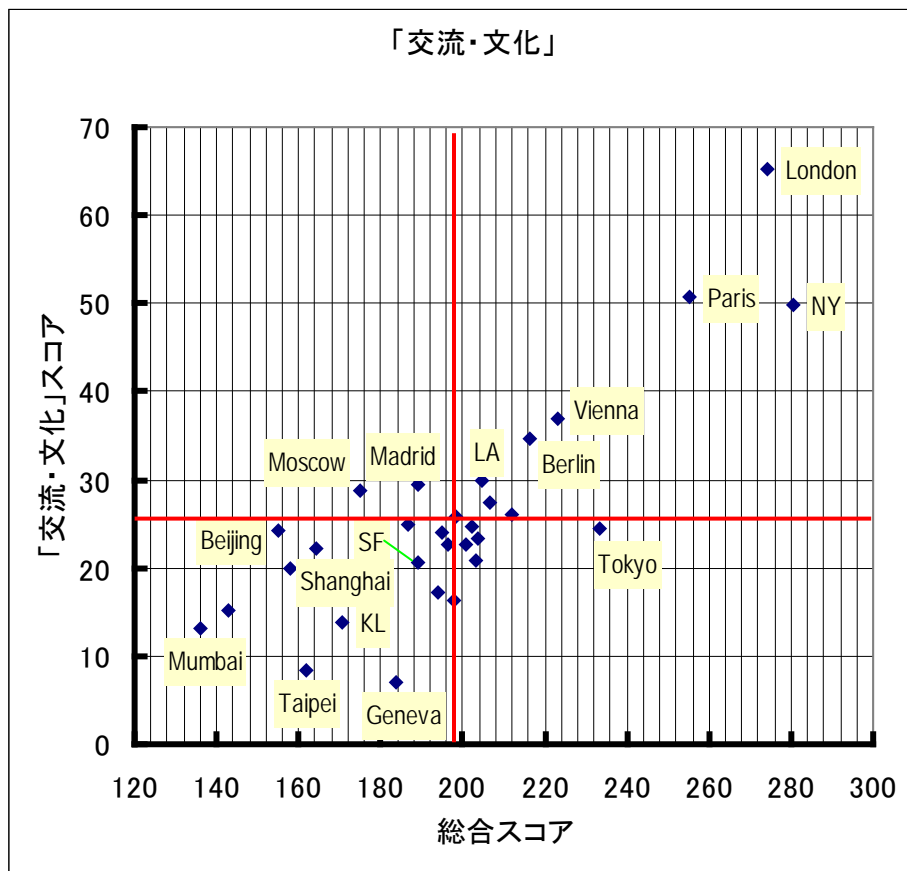


図 5-3 総合と「交流・文化」各スコアによる都市分布

4) 居住・環境

分野別の各都市の「居住・環境」スコアと、総合スコアの関連をみると、総合でベスト5にランクされた都市のうち、パリ、ウィーンのみが平均以上の評価となっており、ニューヨーク、ロンドン、東京はいずれも平均未満の評価となっている。

平均値と比べた上下で傾向をみると、下表にあげたように、総合スコアと「居住・環境」スコアでそれぞれの指標の傾向が平均以上、平均未満と一致した都市数は17で、「経済」スコアと同様、全体（30都市）の約半数となっている。

「居住・環境」スコアと各分野の合計値である総合スコアとの関係を図化すると、その他の分野と比較して、ばらつきが最も大きく、総合スコアでは平均未満でありながら、「居住・環境」スコアが平均以上の都市が、8都市と、全体の約3分の1近くに達している。

総合スコアが平均未満で、「居住・環境」スコアが平均以上の8都市は、フランクフルト、コペンハーゲン、ジュネーブ、マドリッド、ブリュッセル、サンフランシスコ、クアラルンプール、ミラノと、欧州の都市が非常に多い（6都市）。

表 5-4 総合と「居住・環境」各スコアの平均以上・未満の都市数

		総合スコア (平均: 197.0)		
		平均未満	平均以上	計
居住・環境 スコア (平均: 68.6)	平均以上	8	10	18
	平均未満	7	5	12
	計	15	15	30

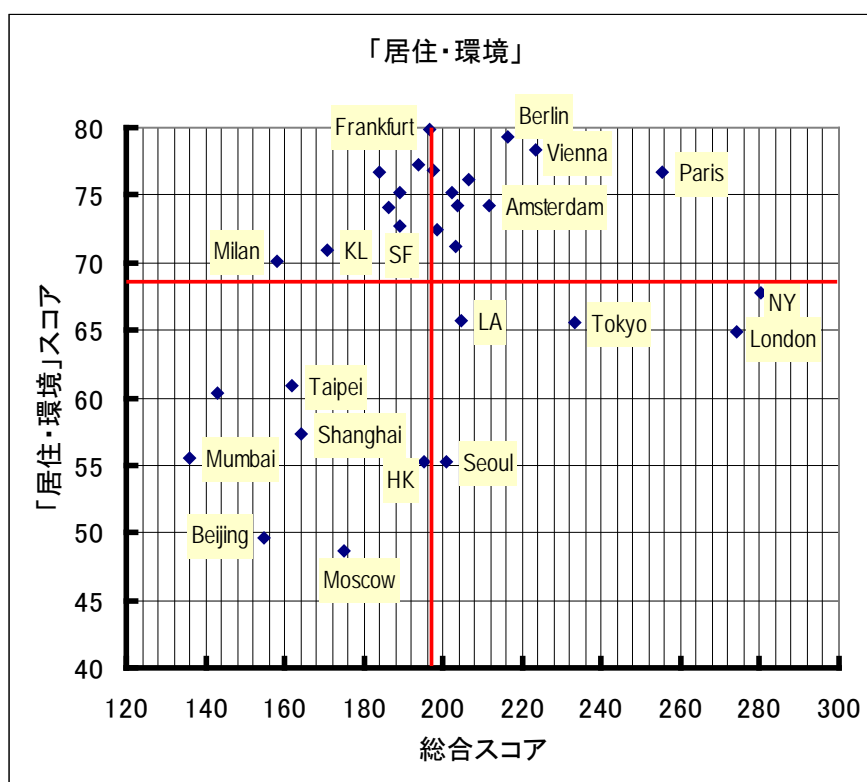


図 5-4 総合と「居住・環境」各スコアによる都市分布

5) 空間・アクセス

分野別の各都市の「空間・アクセス」スコアと、総合スコアの関連をみると、総合でベスト5にランクされた都市のうち、ニューヨーク、ロンドン、パリは非常に高い評価になっており、ウィーンも平均以上の評価である一方で、東京は平均未満の評価となっている。東京は「公共交通（主に地下鉄）の駅密度」「公共交通の定時性」「国際線旅客数」「滑走路本数」等で高評価を得ている一方で、「1人当りオフィス面積」「都心部の緑被状況」都心から国際空港までのアクセス時間」「通勤・通学の所要時間」などで非常に低い評価となっており、これらがこの分野の評価を大きく引き下げる要因となっている。

平均値と比べた上下で傾向をみると、下表にあげたように、総合スコアと「空間・アクセス」スコアでそれぞれのスコアの傾向が平均以上、平均未満と一致した都市数は19で、「経済」「居住・環境」スコアと「研究・開発」「交流・文化」スコアの間、19都市で、全体（30都市）の約3分の2となっている。

「空間・アクセス」スコアと各分野の合計値である総合スコアとの関係を図化すると、「居住空間」よりは、ばらつきは少ないが、「交流・文化」よりは大きく、やはり中間的なばらつきになっていることがうかがえる。

表 5-5 総合と「空間・アクセス」各スコアの平均以上・未満の都市数

		総合スコア (平均: 197.0)		
		平均未満	平均以上	計
空間・アクセススコア (平均: 34.5)	平均以上	6	10	16
	平均未満	9	5	14
	計	15	15	30

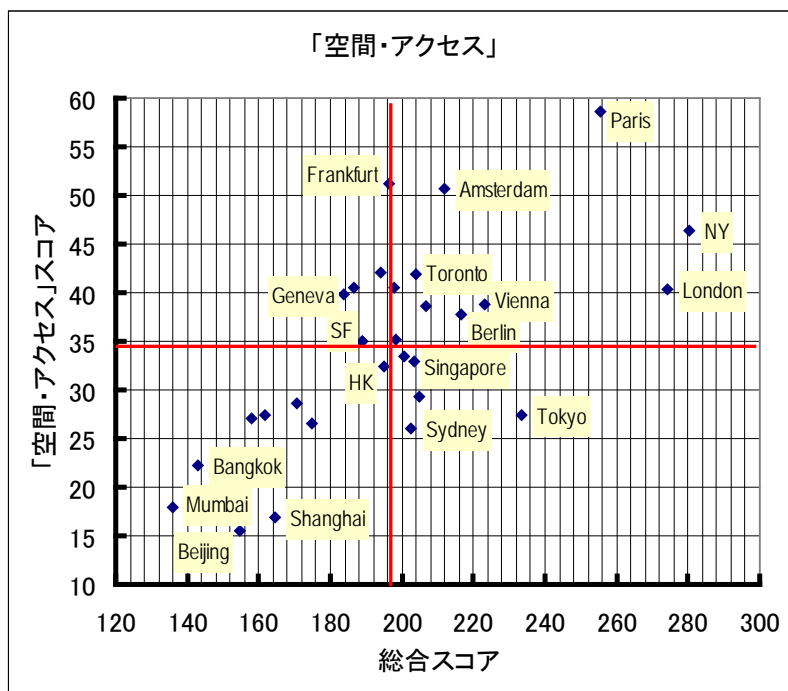


図 5-5 総合と「空間・アクセス」各スコアによる都市分布

6) 分野別各スコアと総合スコアの相関

分野別の各都市のスコアと、総合スコアの関連について、総合スコアと各スコアの相関係数をとって比較すると、下表のとおり、「交流・文化」との相関が最も強く(0.82)、次いで「研究・開発」(0.75)、「空間・アクセス」(0.67)となった。逆に、「経済」は0.41、「居住・環境」は0.38と低くなっており、比較的相関性が弱いことがわかる。

この結果から、「交流・文化」や「研究・開発」に強みのある都市は、総合的に上位に評価される傾向が強く、逆に「経済」や「居住・環境」に優れていても、必ずしも総合的にみて上位に評価されるとは限らないことを意味する。

本調査の対象30都市の地域別分布は、アジア(シドニー含む)11都市、北米(トロント含む)6都市、欧州(モスクワ含む)13都市となっているが、総合順位ベスト10に入った都市は、アジア1都市、北米4都市、欧州5都市となった。アジアの都市が比較的「経済」に強みを発揮する都市が多く、結果として総合的にみたときのアジアの都市の強さに結びつかなかったことがうかがえる。

表 5-6 各分野と総合スコアの相関係数

分野	総合スコアとの相関係数
「経済」	0.41
「研究・開発」	0.75
「交流・文化」	0.82
「居住・環境」	0.38
「空間・アクセス」	0.67

(2) アクター別の個別結果

1) 経営者

アクター別の「経営者」のスコアに対して、分野別でもっとも関連が深いと思われる「経済」のスコアとの比較を下図に示した。両者の相関係数は0.66と比較的高いが、個別の都市をみると、「経済」において高い評価を得たニューヨーク、東京、ロンドン、香港、北京、上海、シンガポール、ベルリン等の都市では、「経営者」の視点からみた評価は大きく分かれる結果となった。

ニューヨーク、ロンドン、香港、シンガポールの各都市は、「経営者」の視点からみた評価も高く、一方、東京、北京、上海、ベルリンの各都市は、東京の14位が最高位と、低い評価となっている。

「経営者」のスコアの内訳をみると(次頁)、ニューヨーク、ロンドン、香港は「関連サポート産業の集積」「家族及び従業員にとっての良好な環境」「政治・経済・災害リスク」において比較的高い評価を得ている。一方、東京、北京、上海は、特に「関連サポート産業の集積」「政治・経済・災害リスク」で大きく差をつけられており、これが「経営者」の観点からの評価で大差がつく主因になったものと考えられる。また、特に北京や上海は、「ビジネスの成長性」で他の都市を大きく上回るものの、その他の項目はいずれも低くなっており、スコアが伸びない結果となった。

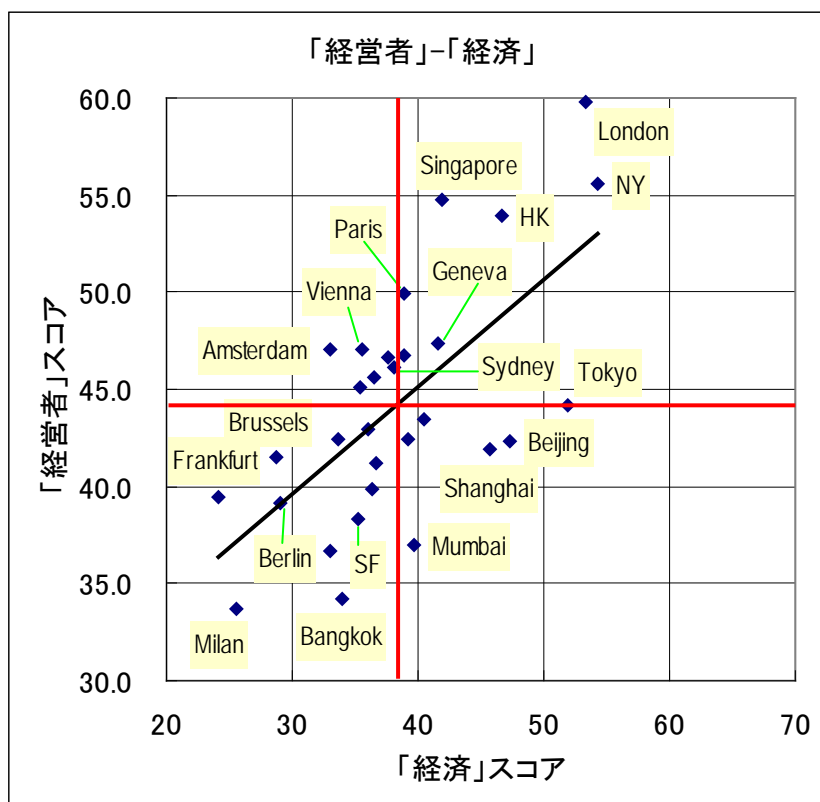


図 5-6 「経営者」と「経済」の関係にみる各都市の分布

注) 赤い線はそれぞれのスコアの平均値の水準、黒い線は両スコアの線形近似直線を示す

アクター別・要素別のスコア比較（主要都市）

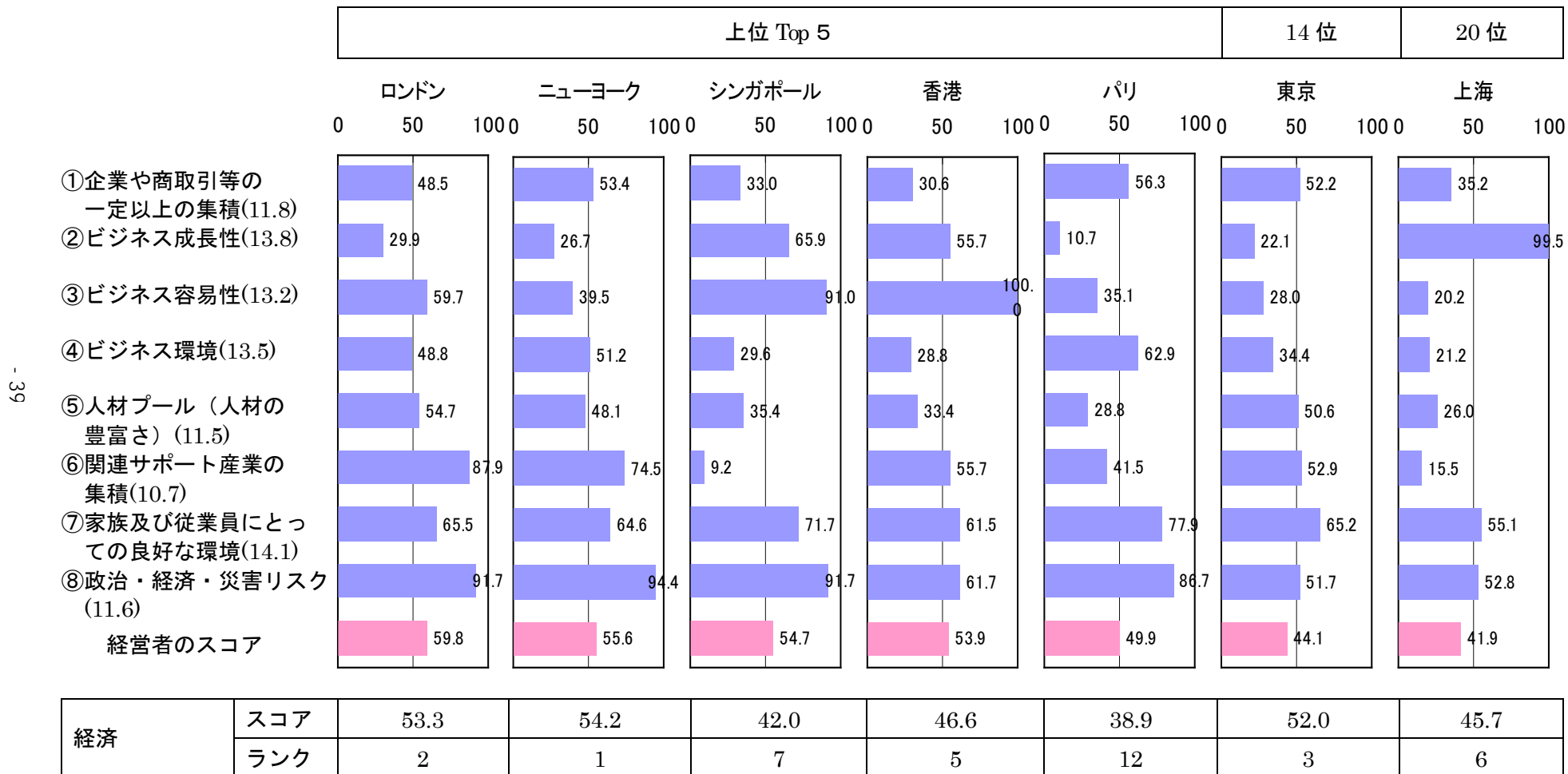


図 5-7 【経営者】重視する要素（ウエイト）

2) 研究者

アクター別の「研究者」のスコアに対して、分野別でもっとも関連が深いと思われる「研究・開発」のスコアとの比較を下図に示した。両者の相関係数は0.91と非常に高く、強い正の相関性が認められる。個別の都市をみると、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ウィーンなどが「研究・開発」の評価に比べて「研究者」の視点からみた評価が高い傾向があり、逆に東京、ソウル、香港、台北などが「研究者」の視点からみた評価に比べて「研究・開発」の評価の方が高い傾向がある。「研究・開発」の評価の方が高くなっている都市に多くアジアの都市がみられることが特徴的である。

「研究者」の視点からみた評価の内訳をみると（次頁）、ニューヨーク、ロンドンと東京の大きな差は、「質の高い研究機関・研究者・指導者の存在」（ウエイト18.5%）及び「研究活動における発想や思考に対して刺激となる空間・機会の存在」（ウエイト16.3%）において大きな差がついており、これはアジアの都市の同様の課題としてみられる。

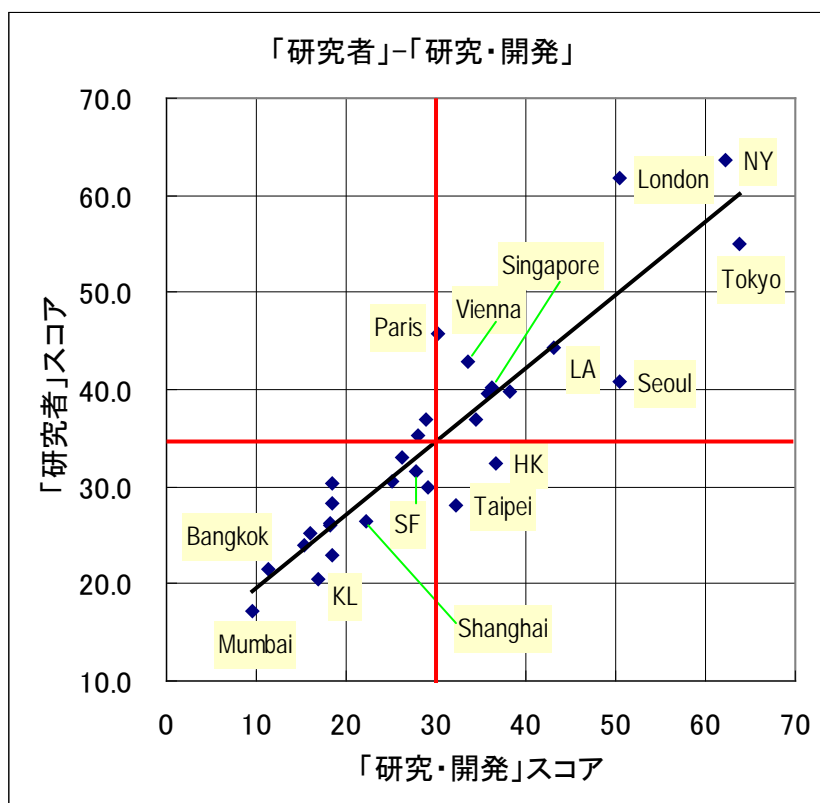
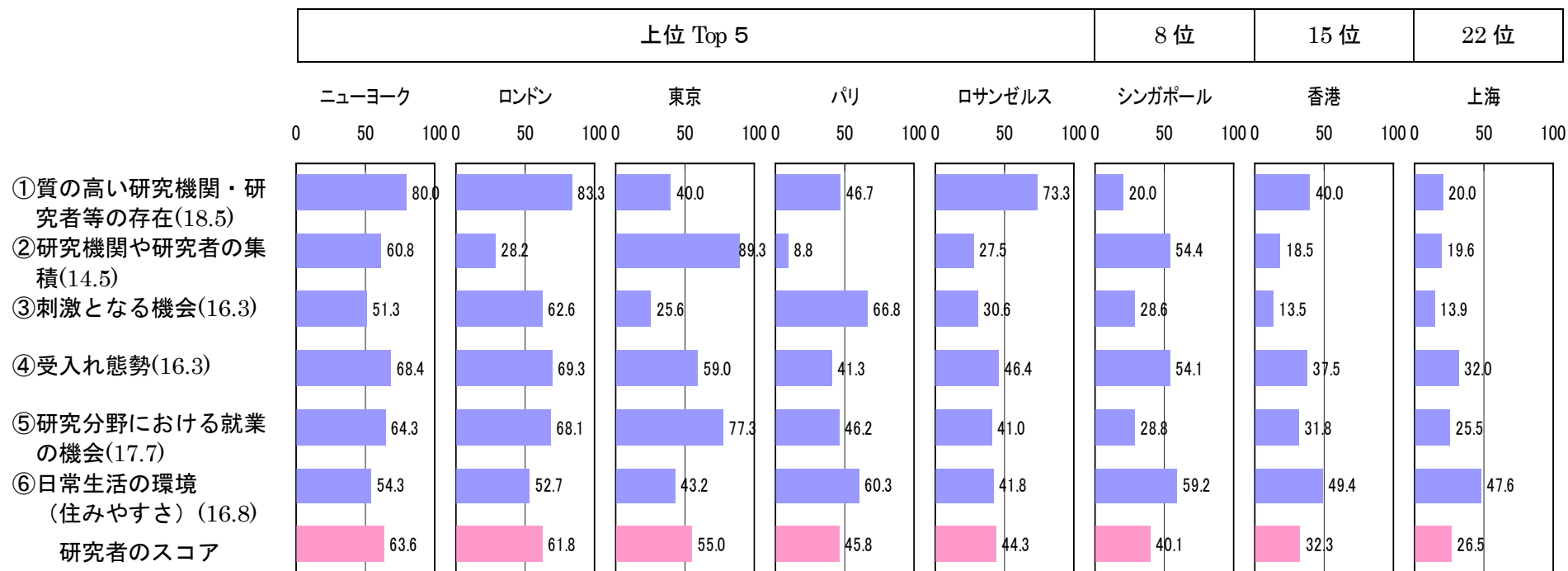


図 5-8 「研究者」と「研究・開発」の関係にみる各都市の分布

注) 赤い線はそれぞれのスコアの平均値の水準、黒い線は両スコアの線形近似直線を示す

アクター別・要素別のスコア比較（主要都市）



- 41 -

研究・開発	スコア	62.3	50.5	63.9	30.2	43.1	36.2	36.6	22.3
	ランク	2	3	1	13	5	8	7	20

図 5-9 【研究者】重視する要素（ウエイト）

3) アーティスト

アクター別の「アーティスト」のスコアに対して、分野別でもっとも関連が深いと思われる「交流・文化」のスコアとの比較を下図に示した。両者の相関係数は0.88と高く、正の相関性が認められる。個別の都市をみると、ニューヨーク、ベルリンなどが「交流・文化」の評価に比べて「アーティスト」の視点からみた評価が高い傾向があり、逆にロンドン、パリなどが「アーティスト」の視点からみた評価に比べて「交流・文化」の評価の方が高い傾向がある。また、ニューヨーク、ロンドン、パリの評価がいずれの評価も突出して高く、その他の都市を大きく引き離しており、多くの都市がスコアの平均値を中心として比較的密集している点が特徴的である。

「アーティスト」の視点からみた評価の内訳をみると（次頁）、ニューヨークとロンドンの差は、「マーケットの存在」（ウエイト17.7%）及び「創作環境（スタジオ、アトリエ賃料、広さなど）」（ウエイト21.5%）での差が影響したものと考えられる。「交流・文化」では10ポイント以上の開きがあったパリとベルリンが、「アーティスト」の視点からみた評価で拮抗しているのは、比較的ウエイトの高い「日常生活の環境（住みやすさ）」（ウエイト22.6%）、「文化的刺激」（ウエイト20.6%）、「アーティストの集積」（ウエイト17.6%）において、ベルリンがパリを上回り、他の要素ではパリを下回りながらも、これをカバーすることができたことが要因である。

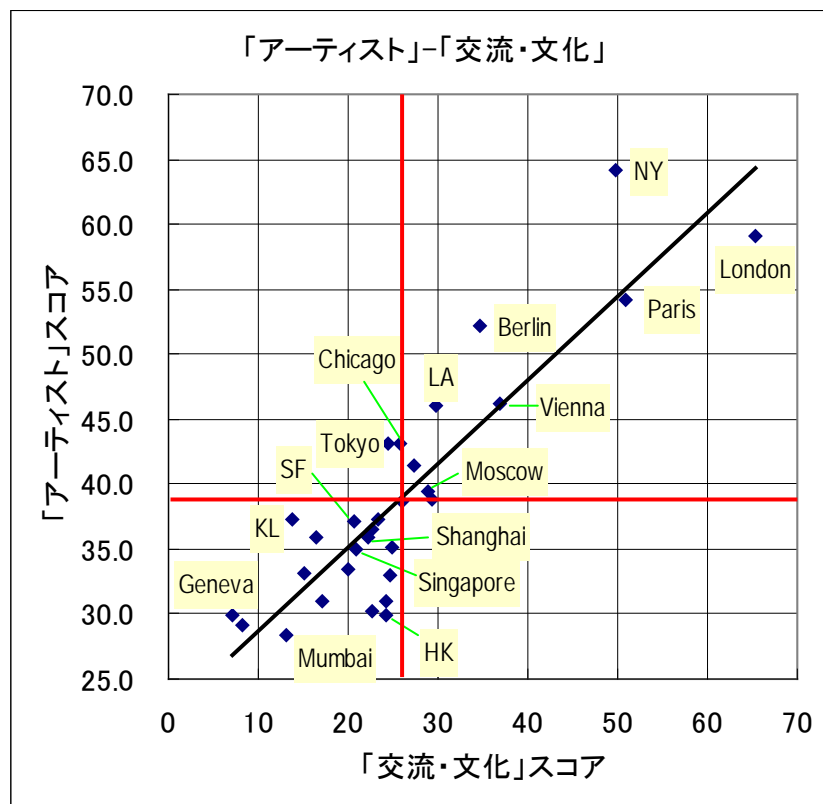
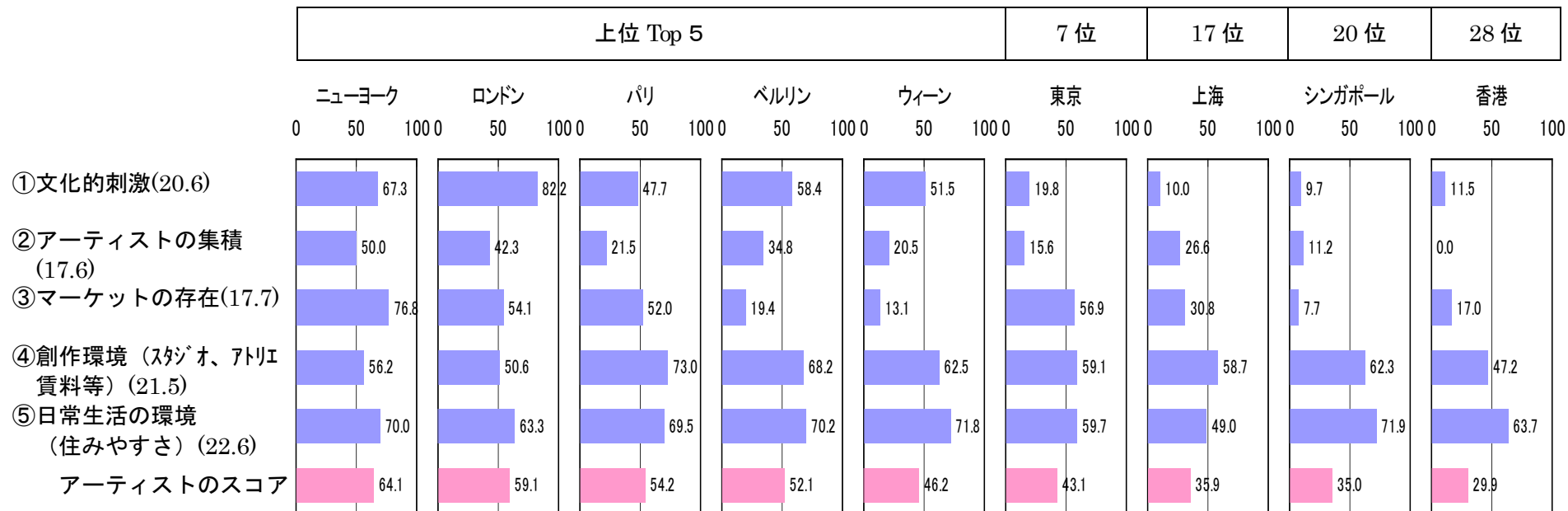


図5-10 「アーティスト」と「交流・文化」の関係にみる各都市の分布

注) 赤い線はそれぞれのスコアの平均値の水準、黒い線は両スコアの線形近似直線を示す

アクター別・要素別のスコア比較（主要都市）



交流・文化	スコア	49.8	65.3	50.8	34.6	37.0	24.4	22.1	20.9	24.1
	ランク	3	1	2	5	4	14	20	21	16

図 5-11 【アーティスト】重視する要素（ウエイト）

4) 観光客

アクター別の「観光客」のスコアに対して、分野別でもっとも関連が深いと思われる「交流・文化」のスコアとの比較を下図に示した。両者の相関係数は0.84と高く、正の相関性が認められる。個別の都市をみると、ロンドン、ニューヨーク、パリなど上位の都市では「観光客」の視点からみた評価「交流・文化」の評価のいずれもが高く、その順位も同等である。それに次ぐウィーン、ボストンは「交流・文化」の評価に比べて「観光客」の視点からみた評価が高く、ベルリン、モスクワは低く評価されている。また、上位3都市が他の都市のスコアを大きく引き離している点は、前項「アーティスト」と同様の特徴である。

「観光客」の視点からみた評価の内訳をみると（次頁）、ウィーンは、ボストンのほぼすべての要素において上回りながらも、「宿泊施設」（ウエイト 14.3%）で大きく引き離された結果、ボストンに次いで5位となっている。アジアの諸都市は、トップ5に食い込むことはできなかったが、その大きな要因は、「観光の対象の存在」（ウエイト 14.8%）、「宿泊施設」（ウエイト 14.3%）に大きな差があることに起因する。一方では、香港、シンガポール、東京、上海は、「料理」（ウエイト 12.3%）、「買い物」（ウエイト 10.4%）において、トップ5と大きな差はなく拮抗している。

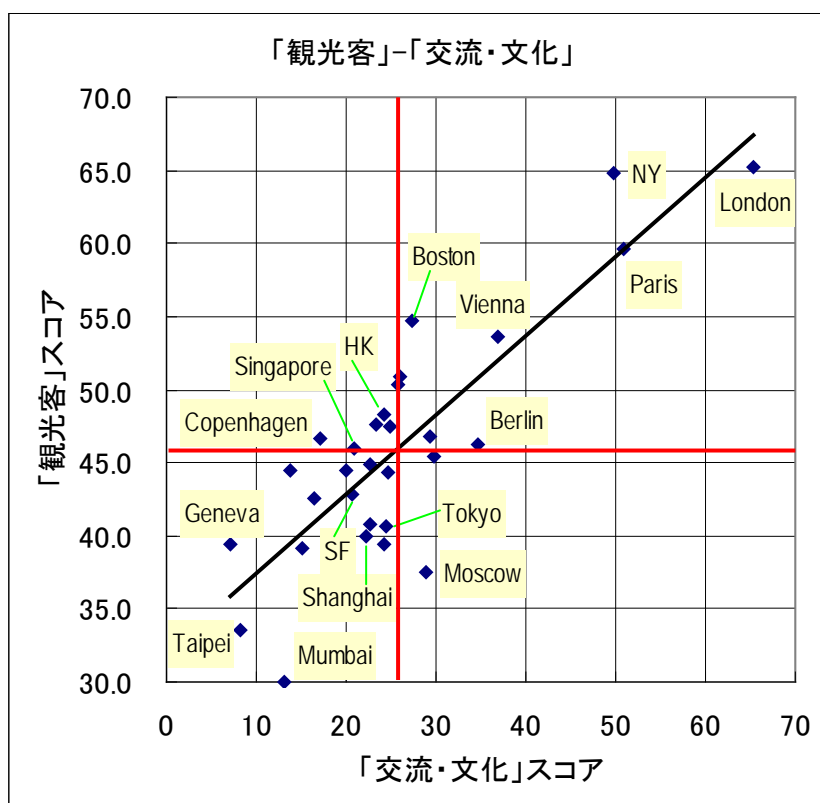
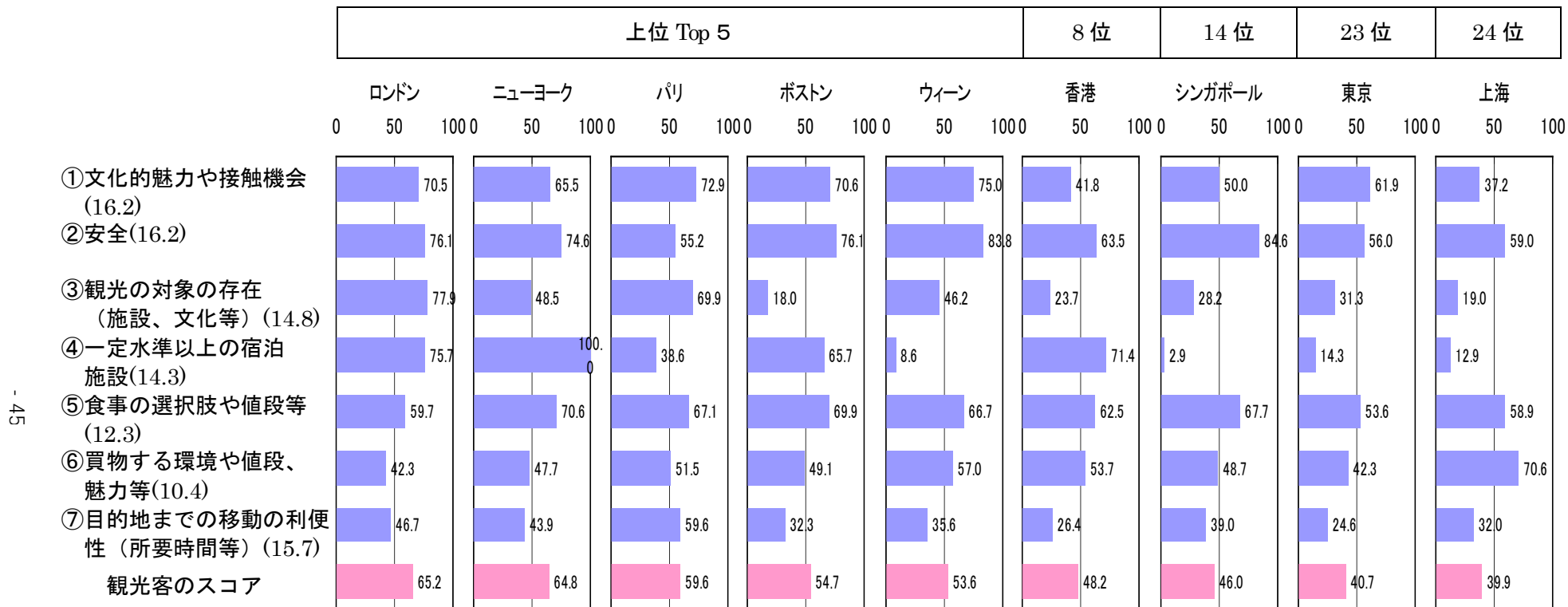


図5-12 「観光客」と「交流・文化」の関係にみる各都市の分布

注) 赤い線はそれぞれのスコアの平均値の水準、黒い線は両スコアの線形近似直線を示す

アクター別・要素別のスコア比較（主要都市）



交流・文化	スコア	64.9	67.8	76.8	76.2	78.4	65.6	57.4	71.2	55.2
	ランク	1	3	2	9	4	14	20	21	16

図 5-13 【観光客】重視する要素（ウエイト）

5) 生活者

アクター別の「生活者」のスコアに対して、分野別でもっとも関連が深いと思われる「居住・環境」のスコアとの比較を下図に示した。両者の相関係数は0.76と比較的高いが、パリ、ニューヨーク、東京、ロンドンなど総合順位上位の都市と、ムンバイ、バンコク、モスクワなど下位の都市が近似直線との開きが大きくなっている。前者は「居住・環境」の評価に比べて「生活者」の視点からみた評価が高く、後者はその逆の傾向がみられる。また、他のアクター別の結果では上位都市が他都市を大きく引き離して高いスコアとなっているのに対して、むしろ評価の高い側に多くの都市が密集している点が大きな特徴となっている。

「居住・環境」の面で比較的近いスコアとなったニューヨーク、東京、ロンドンに対して、「居住・環境」及び「生活者」の視点で上位に上がったパリ、ウィーン、ベルリンの大きな差は、「就業環境」(14.8%)である。前者は、「経済」スコアが上位にランクインし、労働環境も良好なため、雇用機会を望む「生活者」としての位置づけが、このランクアップの大きな要因となっている。

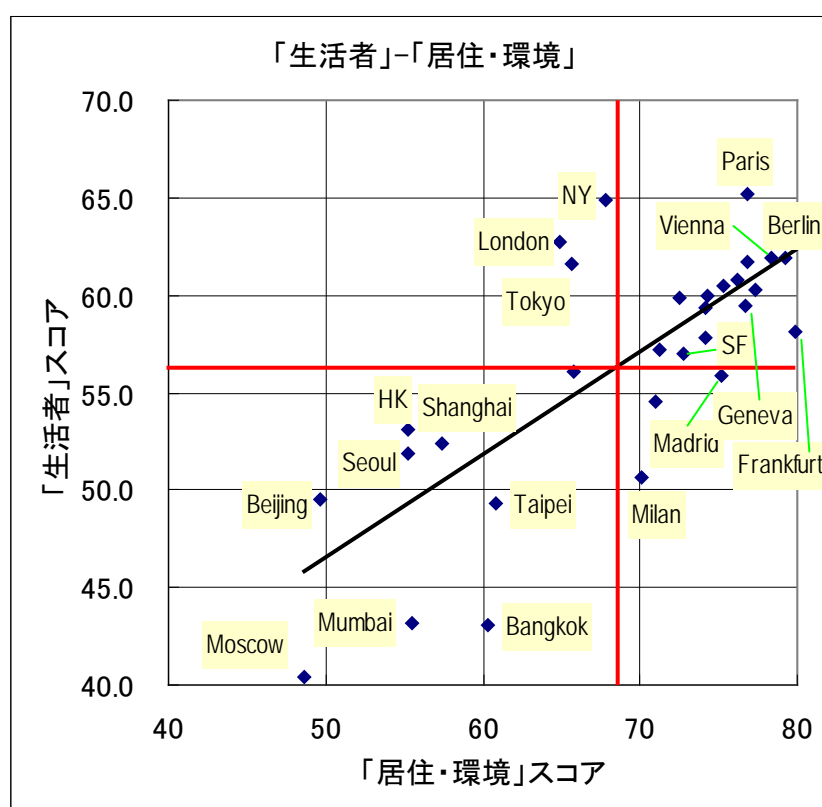
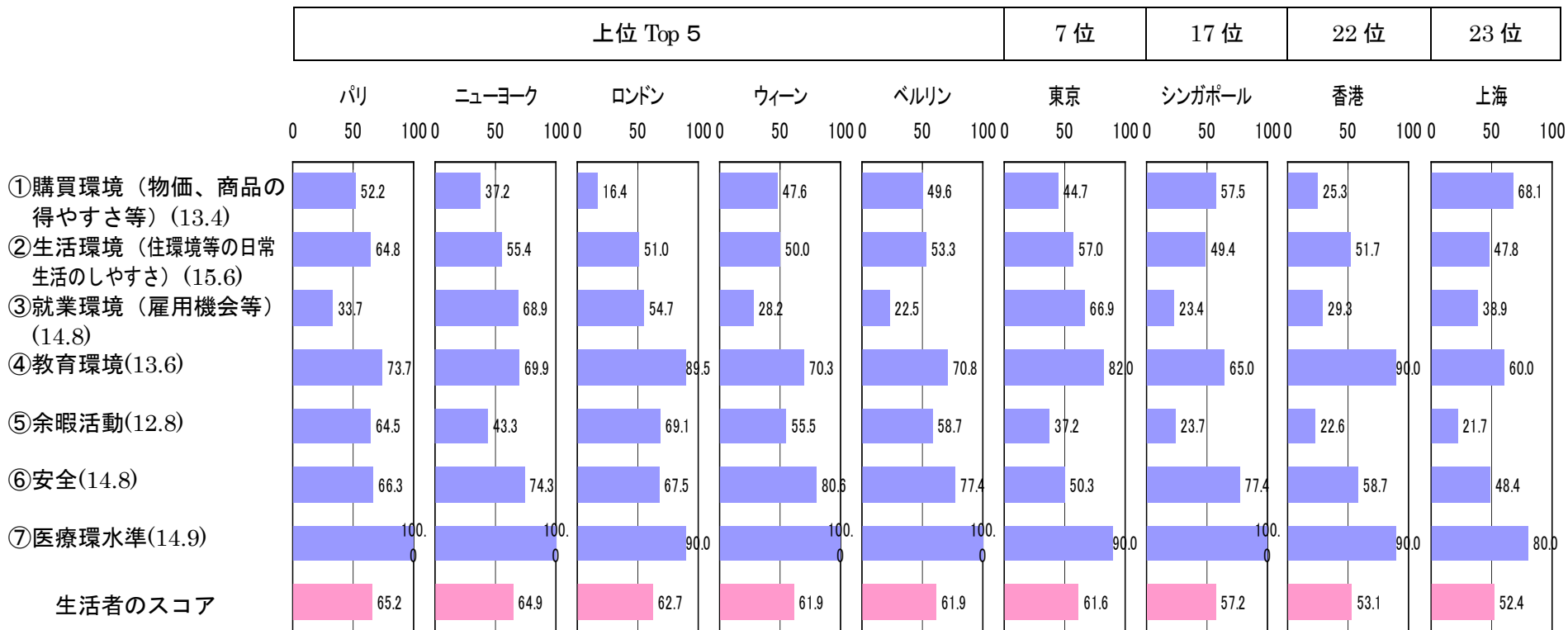


図5-14 「生活者」と「居住・環境」の関係にみる各都市の分布

注) 赤い線はそれぞれのスコアの平均値の水準、黒い線は両スコアの線形近似直線を示す

アクター別・要素別のスコア比較（主要都市）



居住・環境	スコア	76.8	67.8	64.9	78.4	79.3	65.6	71.2	55.2	57.4
	ランク	6	19	22	3	2	21	16	27	25

図 5-15 【生活者】 重視する要素（ウエイト）

6. 世界の主要都市と比較しての東京の課題

以上までに見てきたように、東京は「研究者」「アーティスト」「生活者」はベスト 10 以内に入っている一方で、「観光客」は 23 位、「経営者」は 14 位と、両者の視点からみた評価が極端に低くなっている。しかし分野別総合ランク 5 位以内の都市をみると、東京を除いた他の 4 都市は全てのアクターにとってベスト 10 に入っている。

表 6-1 分野別総合ランク上位 5 都市のアクター別ランク

	「経営者」	「研究者」	「アーティスト」	「観光客」	「生活者」
New York	2	1	1	2	2
London	1	2	2	1	3
Paris	5	4	3	3	1
TOKYO	14	3	7	23	7
Vienna	7	6	5	5	4

そこで、東京の評価が低い「経営者」「観光客」の視点からみた都市の魅力向上のための課題を探るため、アクター別ランキングの評価において、各アクターが重視する要素（丸数字の項目）ごとのスコアを基に、その要因を以下に分析した。

「経営者」に魅力的な都市とするための東京の課題は、規制や税率などの面でビジネスの容易性を向上させることや災害危険度の低減等、ビジネスをとりまく環境の改善である。

東京の場合、「経営者」が重視する要素のうち「①企業や商取引等の一定以上の集積」や「⑥関連サポート産業の集積」といったビジネスにとって直接的な要素については高い評価を得ているものの、「②ビジネスの成長性」、規制や税率などの「③ビジネスの容易性」、「⑦家族や従業員にとっての環境」「⑧政治・経済・災害リスク」等、ビジネスを展開する上での周辺環境に関する要素では必ずしも高い評価を得ていない。

また、「経営者」の観点でみたときに、東京と香港・シンガポールの比較でいうと「②ビジネスの成長性」、規制や税率などの「③ビジネスの容易性」に大きな差があり、香港やシンガポールが圧倒的に高評価を得ている。

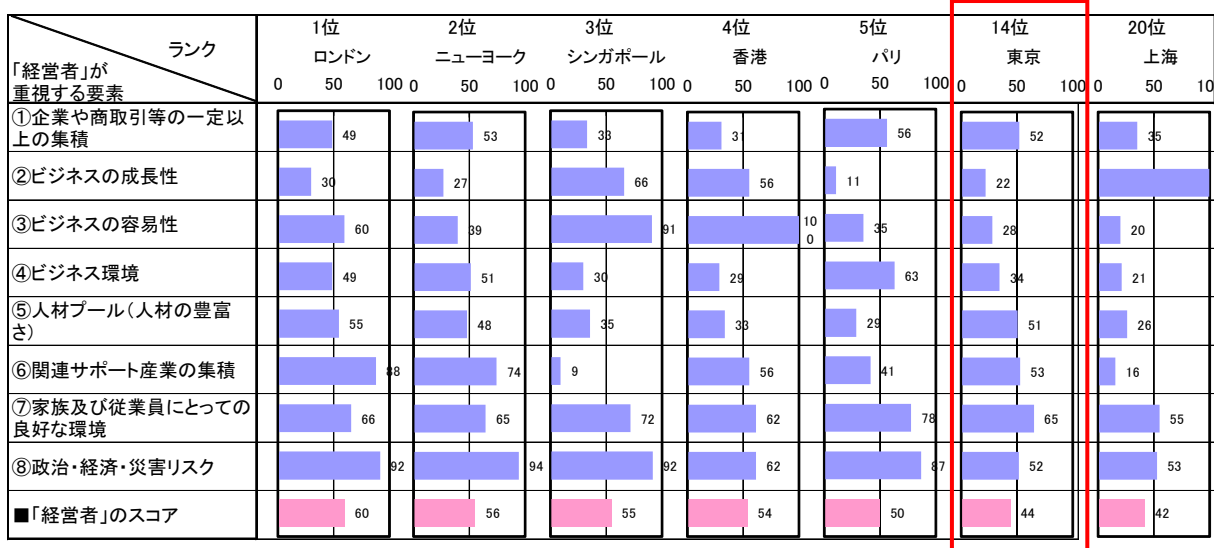


図 6-1 「経営者」が重視する要素別にみた主要都市の評価

これは、「経営者」の視点から見た場合、東京が世界のトップ都市と比較して、物価水準や税率の高さ、従業員にとっての良好な環境（例えば外国人を受け入れる教育機関などの充実度）が不足していることを示している。

以上のように、「経営者」はビジネス拠点を選択する際に、上記のような「ビジネス周辺環境」の充実も重視しており、これらのマイナス要素の克服が東京の大きな課題である。

「観光客」に魅力的な都市とするための東京の課題は、ハイクラスホテルの充実や魅力的な観光資源を充実させること等、観光をとりまく環境の改善である。

「観光客」の視点から見た場合、東京は23位と世界の主要都市から大きく引き離されている。

この要因として、「観光客」が重視する要素を世界のトップ都市と比較してみた場合、①から⑦の要素のうち、大半の要素で上位トップ5よりスコアが低く、とりわけ「③観光の対象の存在（施設、文化等）」「④宿泊施設」のスコアが低いことがあげられる。

これは、東京が世界のトップ都市と比較して、外国人を受け入れる魅力的な観光資源に欠けていることや、外国人が滞在するための宿泊施設、特にハイクラスのホテルが著しく不足していることを表している。

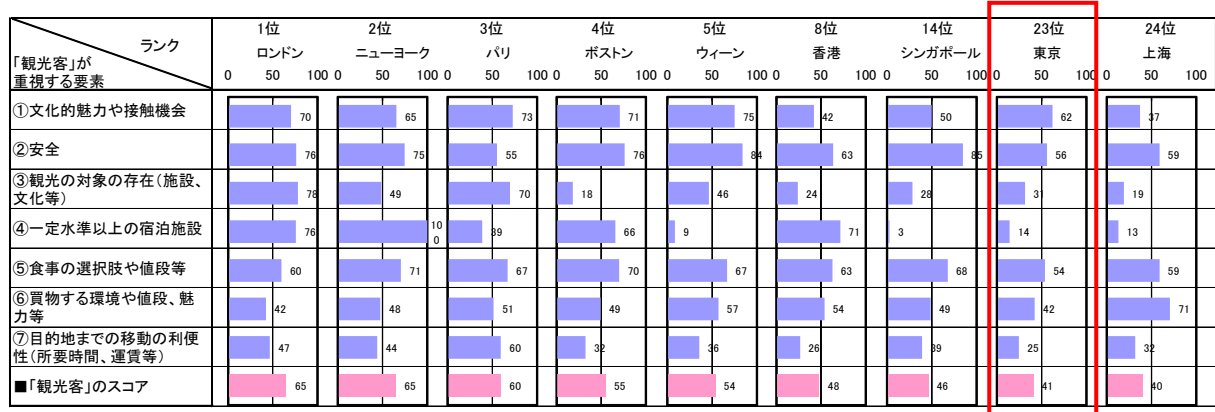


図 6-2 「観光客」が重視する要素別にみた主要都市の評価

資料編

資料1. 検討メンバーの略歴

最高顧問

ピーター・ホール卿

ロンドン大学バートレット校教授



<略歴>

1932年ロンドン生まれ。ケンブリッジ大学大学院で修士・博士課程修了。英国レディング大学、カリフォルニア大学バークレー校教授を歴任。ブリティッシュ・アカデミーフェロー、ヨーロッパアカデミー会員。

1998年都市計画協会への貢献によりナイトの称号を授与された。世界都市を研究する世界的ネットワークである Globalization and World Cities Research Network の名誉創設者の一人

ロンドン、シンガポール、アデレード大都市圏（オーストラリア）、ライプツヒ（ドイツ）などの計画作成にもかかわる。

21世紀都市化世界委員会招集者

イギリス政府 戦略計画のスペシャルアドバイザー

<主な著書>

London 2000

The World Cities

Cities of Tomorrow: An Intellectual History of Urban Planning and Design in the Twentieth Century

Cities in Civilization: Culture, Technology, and Urban Order

第三者評価員（ピアレビューアー）

アレン・J・スコット

カリフォルニア大学ロサンゼルス校 地理学部および公共政策学部 教授



<略歴>

ノースウェスタン大学（Northwestern University）大学院修士・博士課程修了、地理学博士。1987年、アメリカ地理学会賞受賞。1999年、ブリティッシュ・アカデミー客員フェロー

<主な著書>

Social Economy of the Metropolis: Cognitive-Cultural Capitalism and the Global Resurgence of Cities

The Cultural Economy of Cities

Regions and the World Economy

Metropolis: From the Division of Labor to Urban Form

ピーター・ネイカンフ

フリー大学（VU University Amsterdam）教授/ティンベルゲン研究所フェロー



<略歴>

エラスマス大学（Erasmus University, Rotterdam）修士・博士課程修了（Tinbergen Institute Fellow, Amsterdam）

オランダ政府、欧州委員会、世界銀行、OECD等の各アドバイザーを務める

<主な著書>

Regional Cohesion and Competition in the Age of Globalization

Innovation, Space and Economic Development
Advances in Modern Tourism Research

委員会メンバー

竹中平蔵

慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所 所長・教授／森記念財団都市戦略研究所長



<略歴>

1951年和歌山県生まれ。一橋大学経済学部卒業。日本開発銀行勤務、ハーバード大学客員准教授、慶應義塾大学総合政策学部教授等を経て、2001年経済財政政策担当大臣を皮切りに、金融担当大臣、郵政民営化担当大臣兼務、総務大臣を歴任。06年より現職。経済学博士。

<主な著書>

『構造改革の真実 竹中平蔵大臣日誌』等多数。

リチャード・ベンダー

カリフォルニア大学バークレー校名誉学部長／東京大学客員教授



<略歴>

マサチューセッツ工科大学卒。ハーバード大学大学院修士課程修了。建築・都市計画分野の重鎮として、米国、欧州、アジアで活躍。日本では民間都市開発や自治体の都市計画アドバイザーを務める。2004年 日本都市計画学会国際交流賞受賞。

<主な著書>

A Crack in the Rearview Mirror : Views of the Industrialization of Building. The Future of Housing, in “A Global Strategy for Housing”

サスキア・サッセン

シカゴ大学教授／コロンビア大学教授／ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス客員教授



<略歴>

アルゼンチン生まれ。ブエノスアイレス国立大学、イタリア・ローマ大学卒業。米国インディアナ州ノートルダム大学で社会学修士、同博士、経済学博士号を取得。ハーバード大学、ニューヨーク市立大学、シカゴ大学、ロンドン大学を経て、現在コロンビア大学社会学教授、コロンビア大学「世界考想」委員会主宰

Globalization and World Cities Research Network の名誉創設者の一人
MasterCard Centers of Commerce Index のナレッジパネルの一人

<主な著書>

Cities in a World Economy、The global city : New York, London, Tokyo
Globalization and its Discontents. Essays on the New Mobility of People and Money

市川宏雄

明治大学専門職大学院長／公共政策大学院ガバナンス研究科長・教授



<略歴>

1947年東京都生まれ。早稲田大学理工学部建築学科、同大学院を経て、ウォータールー大学大学院博士課程修了。Ph.D. 長く東京研究並びに世界都市論を手掛け、東京都の初めての都市白書 91 作成のアドバイザーとして活躍して以来、「都市づくりビジョン」のコアメンバー、「東京自治制度懇談会」等の一連の委員を務め、広く国内外で活躍。

<主な著書>

『グローバルフロント東京』『文化としての都市空間』『図解東京都を読む事典』『首都圏自治体の攻防』『成熟都市東京のゆくえ』『東京はこう変わる』等多数

資料2. 有識者パートナー一覧

本ランキングを作成するに当たり、アクター別の観点から、各界の有識者の方々に「有識者パートナー」として助言等を頂戴した。その一覧を以下に掲載する。

有識者パートナー	所属等	主な観点 (アクター別)
蛭田 啓 氏	早稲田大学大学院商学研究科 准教授	経営者
チャールズ・レイク 氏	在日米国商工会議所 (ACCJ) 会長	
モンテ・カセム 氏	立命館アジア太平洋大学 学長	研究者
高橋 潤二郎 氏	慶應義塾大学名誉教授	
南條 史生 氏	森美術館館長	アーティスト
会田 誠 氏	現代芸術家	
橋爪 紳也 氏	大阪府立大学特別教授	観光客
セーラ・マリ・カミングス 氏	株式会社小布施堂代表取締役	
佐藤 友美子 氏	財団法人サントリー文化財団 上席研究フェロー	生活者
関沢 英彦 氏	東京経済大学教授・博報堂生活総合研究所 エグゼクティブフェロー	

資料4. 分野別総合ランクトップ3都市とアジアの主要3都市の評価結果概要

(1) 分野別総合ランクトップ3都市

○ニューヨーク

「居住・環境」を除き（19位）、分野別、アクター別のどのスコアも上位4位以内という圧倒的な競争力で、分野別総合ランキングで1位となった。

総合スコア:280.5

分野別	「経済」	「研究・開発」	「交流・文化」	「居住・環境」	「空間・アクセス」
	54.2 (1)	62.3 (2)	49.8 (3)	67.8 (19)	46.3 (4)
アクター別	「経営者」	「研究者」	「アーティスト」	「観光客」	「生活者」
	55.6 (2)	63.6 (1)	64.1 (1)	64.8 (2)	64.9 (2)

○ロンドン

ニューヨークには及ばなかったものの、やはり「居住・環境」（22位）以外はすべてトップ10圏内、「空間・アクセス」の9位を除けばすべてのスコアがトップ5以内という総合力を発揮しての第2位となった。

総合スコア:274.4

分野別	「経済」	「研究・開発」	「交流・文化」	「居住・環境」	「空間・アクセス」
	53.3 (2)	50.5 (3)	65.3 (1)	64.9 (22)	40.3 (9)
アクター別	「経営者」	「研究者」	「アーティスト」	「観光客」	「生活者」
	59.8 (1)	61.8 (2)	59.1 (2)	65.2 (1)	62.7 (3)

○パリ

上位2都市と異なり、分野別の「経済」及び「研究・開発」では比較的順位が低かったものの、その他のスコアが概ねトップ5以内にランクされて、総合第3位となった。経済的な魅力よりも文化、環境、空間的な魅力に優れる傾向が浮かび上がった。

総合スコア:255.3

分野別	「経済」	「研究・開発」	「交流・文化」	「居住・環境」	「空間・アクセス」
	38.9 (12)	30.2 (13)	50.8 (2)	76.8 (6)	58.6 (1)
アクター別	「経営者」	「研究者」	「アーティスト」	「観光客」	「生活者」
	49.9 (5)	45.8 (4)	54.2 (3)	59.6 (3)	65.2 (1)

(2) アジアの主要3都市

○シンガポール（分野別総合ランク 11 位）

「経済」と「研究・開発」で7位、8位となったことに加え、特に「経営者」からは3位と、東京をはるかに上回る好評価を得ているが、「研究者」を除くその他の分野・アクターでは、ほぼ16位以下の低い評価となっている。

総合スコア:203.3

分野別	「経済」	「研究・開発」	「交流・文化」	「居住・環境」	「空間・アクセス」
	42.0 (7)	36.2 (8)	20.9 (21)	71.2 (16)	33.0 (18)
アクター別	「経営者」	「研究者」	「アーティスト」	「観光客」	「生活者」
	54.7 (3)	40.1 (8)	35.0 (20)	46.0 (14)	57.2 (17)

○香港（分野別総合ランク 17 位）

「経済」「経営者」で非常に高く評価され、また「研究・開発」では7位に評価されながらも、「交流・文化」「居住・環境」「空間・アクセス」の低評価が影響し、中位の順位となった。また「アーティスト」の評価がとりわけ低い。

総合スコア:195.0

分野別	「経済」	「研究・開発」	「交流・文化」	「居住・環境」	「空間・アクセス」
	46.6 (5)	36.6 (7)	24.1 (16)	55.2 (27)	32.4 (19)
アクター別	「経営者」	「研究者」	「アーティスト」	「観光客」	「生活者」
	53.9 (4)	32.3 (15)	29.9 (28)	48.2 (8)	53.1 (22)

○上海（分野別総合ランク 25 位）

「経済」において6番目の順位に位置しながら、他の4つの分野の評価が非常に低く、結果として総合順位は25位にとどまった。また、アクターの評価は軒並み低い。

総合スコア:164.4

分野別	「経済」	「研究・開発」	「交流・文化」	「居住・環境」	「空間・アクセス」
	45.7 (6)	22.3 (20)	22.1 (20)	57.4 (25)	16.9 (29)
アクター別	「経営者」	「研究者」	「アーティスト」	「観光客」	「生活者」
	41.9 (20)	26.5 (22)	35.9 (17)	39.9 (24)	52.4 (23)

資料5. 主要な既存ランキング

世界各都市あるいは、各国を比較した既存のランキング事例、及びその評価の内容等を、以下のとおり整理した。

(1) 都市ベースの既存ランキング

分類	都市	
機関	PwC (プライスウォーターハウスクーパース)	MasterCard (マスターカード)
名称	Cities of Opportunity: Business-readiness Indicators for the 21st Century (チャンスのある都市 :21世紀に向けたビジネス環境指標)	Worldwide Centers of Commerce Index (ビジネスセンター指標)
分野	ビジネス系	ビジネス系
対象国・都市	世界 11都市 (2007年)	世界 75都市 (2008年)
評価対象	business-readiness	performance as centre of commerce
評価軸	A. 知的資産 B. 技術力・技術革新 C. 交通基盤 D. 人口構成 E. 金融影響力 F. コスト G. ライフスタイル H. 安全性 I. ビジネス環境	1. 法律・政治上の枠組み(10%) 2. 経済安定性(10%) 3. ビジネスのしやすさ(20%) 4. 金融(22%) 5. ビジネスセンター度(12%) 6. 知的財産・情報(16%) 7. 住みやすさ(10%)
評価手法	・評価軸ごとにランクづけ ・9種の評価軸、それを構成する32の指標によって評価	・上記6指標を上記ウエイトづけし算出 ・評価軸及び評価指標は有識者が選定 ・7種の評価軸、それを構成する43の指標、74の準指標によって評価
東京の順位	2位 ※評価軸の各スコアをトータルした順位	3位

分類	都市	
機関	City of London	Globalization and World Cities (Loughborough University)
名称	Global Financial Centres Index 4 (国際金融センター指標)	Leading World Cities
分野	金融系	総合系
対象国・都市	世界 50都市 (2008年9月)	世界 52都市 (2004年)
評価対象	competitiveness of financial center	contemporary globalization
評価軸	A. 人的要素 B. ビジネス環境 C. マーケットアクセス D. インフラ E. 一般的な競争力	A. 経済的グローバリゼーション B. 文化的グローバリゼーション C. 政治的グローバリゼーション D. 社会的グローバリゼーション
評価手法	・統計データに加えアンケートを実施 ・5種の評価軸、それを構成する57の指標によって評価	・4分野について、(1)規模性、(2)ネットワーク性から評価
東京の順位	7位	特定分野に貢献しているグローバルシティ

分類	都市	
機関	Munich Re Group (ミュンヘン再保険会社)	Mercer Human Resource Consulting (マーサー社)
名称	Natural Hazard Index (災害危険指標)	Cost of Living Survey (生計費調査)
分野	災害系	生活系
対象国・都市	世界 50都市 (2005年)	世界 143都市 (2008年)
評価対象	the risk of material losses	cost of living
評価軸	A. 災害危険度 B. 災害への脆弱性 C. 危険にさらされる経済的価値	A. 住宅 B. 交通 C. 食品 D. 衣料 E. 娯楽 (計200品目)
評価手法	・上記3指標の積を算出 ・8種類の自然災害に対する保険会社の評価	・NYを100として指数化
東京の順位	1位(最も危険度が高い) ※東京・横浜のエリアで評価	2位

分類	都市		
機関	Mercer Human Resource Consulting (マーサー社)	UBS	Economist Intelligence Unit
名称	Quality of Living Survey (生活の質調査)	Prices and Earnings (物価・所得調査)	Livability Ranking (都市の住みやすさランキング)
分野	生活系	生活系	居住系
対象国・都市	世界 350都市 (2008年)	世界 71都市 (2006年)	世界 127都市 (2005年)
評価対象	quality of life	prices and earnings	living conditions
評価軸	A. 政治及び社会環境 B. 経済環境 C. 社会文化 D. 公衆衛生 E. 教育 F. 公共サービス及び公共交通 G. レクリエーション H. 商品 I. 住宅 K. 自然環境	A. 財とサービスの価格(計122品目+家賃) B. 賃金 C. 給与所得 D. 労働時間	A. 安全性 B. 健康管理 C. 文化と環境 D. 教育 E. インフラ
評価手法	・10種の評価軸、それを構成する39のクライテリアで評価	・上記4種にカテゴリー分けされる13種の指標を包括的に比較	・上記5指標を上記ウェイトつけし算出 ・統計データに特派員評点を加味 ・5種の評価軸、それを構成する30の指標で評価
東京の順位	35位	-	-

分類	都市
機関	中国社会科学院
名称	Global Urban Competitiveness Report(2007-2008) (全球城市競争力報告(2007-2008))
分野	ビジネス系
対象国・都市	世界 500都市 (2008年)
評価対象	business worth
評価軸	A. 企業素質 B. 人(労働力)資本 C. 産業構造 D. 生活環境 E. ビジネスのソフト環境 F. ビジネスのハード環境 G. グローバルリンケージの度合い
評価手法	・7つの評価軸、それを構成する40指標によって評価
東京の順位	3位

(2) 国ベースの既存ランキング

分類	国													
機関	WEF (世界経済フォーラム)	IMD (国際経営開発研究所)												
名称	World Competitiveness (世界競争力調査)	Global Competitiveness Index (国際競争力指標)												
分野	経済系	経済系												
対象国・都市	世界 134カ国・地域 (2008-2009年)	世界 55カ国・地域 (2008年)												
評価対象	level of productivity of a country (sustainable growth/long-term prosperity)	environment that sustains the competitiveness of enterprise												
評価軸	A. 制度的枠組み B. インフラ C. マクロ経済 D. 健康と初等教育 E. 高等教育と職業訓練 F. 財市場効率性 G. 労働市場効率性 H. 金融市場洗練度 I. 技術的準備 J. 市場規模 K. ビジネス洗練度 L. 技術革新	A. 経済効率 (25%) B. 政府効率 (25%) C. 事業効率 (25%) D. インフラ (25%)												
評価手法	<p>・上記12指標を以下によりウエイトづけし算出 途上国 ←-----→ 先進国</p> <table border="1"> <tr> <td><基礎的要素></td> <td>60%</td> <td>40%</td> <td>20%</td> </tr> <tr> <td><効率性></td> <td>35%</td> <td>50%</td> <td>50%</td> </tr> <tr> <td><革新性></td> <td>5%</td> <td>10%</td> <td>30%</td> </tr> </table> <p>・評価指標のうち2/3がデータ、1/3がアンケート(データは12種の評価軸、それを構成する100種の指標)</p>	<基礎的要素>	60%	40%	20%	<効率性>	35%	50%	50%	<革新性>	5%	10%	30%	<p>・上記4指標を上記ウエイトづけし算出</p> <p>・331のクライテリアで評価</p>
<基礎的要素>	60%	40%	20%											
<効率性>	35%	50%	50%											
<革新性>	5%	10%	30%											

分類	国	
機関	日本経済研究センター	World Bank (世界銀行)
名称	潜在競争力ランキング	Ease of Doing Business Index (ビジネスしやすさ指標)
分野	経済系	ビジネス系
対象国・都市	世界 50カ国 (2006年)	世界 178カ国・地域 (2007年)
評価対象	今後10年間にどれだけ1人当たりGDPを増加させるか	regulatory environment conducting the business
評価軸	A. 国際化 B. 企業 C. 教育 D. 金融 E. 政府 F. 科学 G. インフラ H. IT	A. 事業立上げ (10%) B. 許認可取得 (10%) C. 雇用 (10%) D. 財産権 (10%) E. 資金調達 (10%) F. 投資家保護 (10%) G. 税制 (10%) H. 貿易 (10%) I. 契約履行 (10%) J. 事業終了 (10%)
評価手法	・上記8指標をGDP増分を被説明変数とする 主成分分析に基づきウエイトづけし算出	・上記10指標を上記ウエイトづけし算出

分類	国	
機関	AT Kearney (ATカーニー社)	Economist Intelligence Unit
名称	Measuring Globalization: the Global Top 20 (グローバル・トップ20)	IT Industry Competitiveness Index (IT産業競争力指標)
分野	グローバル系	IT系
対象国・都市	世界 62カ国・地域 (2006年)	世界 64カ国 (2007年)
評価対象	global connectedness	support to the competitiveness of information technology firms
評価軸	A. 経済統合 B. 人的接触 C. 技術的接続性 D. 政治的関与	A. ビジネス環境 (10%) B. ITインフラ (20%) C. 人的資本 (20%) D. 法的環境 (10%) E. 研究開発環境 (25%) F. IT産業へのサポート (15%)
評価手法	-	・上記6指標を上記ウエイトづけし算出

分類	国	
機関	Yale University (イェール大学)	Heritage Foundation (ヘリテージ財団)
名称	Environment Performance Index (環境パフォーマンス指標)	Index of Economic Freedom (経済自由度指標)
分野	環境系	経済系
対象国・都市	世界 133カ国 (2006年)	世界 140カ国・地域 (2007年)
評価対象	environmental performance	economic freedom
評価軸	A. 環境衛生 (50%) B. 大気環境 (10%) C. 水資源 (10%) D. 生産的な天然資源 (10%) E. 生物多様性及び生息環境 (10%) F. 持続可能なエネルギー (10%)	A. ビジネス (10%) B. 貿易 (10%) C. 財政 (10%) D. 政府からの自由 (10%) E. 通貨 (10%) F. 投資 (10%) G. 金融 (10%) H. 財産権 (10%) I. 汚職 (10%) J. 労働 (10%)
評価手法	・上記6指標を上記ウエイトづけし算出 ・統計データに特派員評点を加味	・上記10指標を上記ウエイトづけし算出

(3) その他の主なランキング

- ・"Quality of Life: Top 25 Liveable Cities" (英モノクル誌) 東京 4 位
- ・"Global Creativity Index" (Richard Florida) 日本 2 位
- ・"学習到達度調査 (PISA) " (OECD) 日本 1~2 位グループ
- "Science, Tech., and Industry Scoreboard"

平成 20 年 10 月発行
編集・発行 財団法人 森記念財団

東京都港区六本木 6-10-1
六本木ヒルズ森タワー私書箱 5 号
電話 03(6406)6800(代表) 郵便番号 106-6110

無断転載を禁ず

